

掘ったバイ筑豊2012 in 嘉麻
古代史シンポジウム

地域の視点で古代史を見直す。

6世紀の九州島

ミヤケと 渡来人

予稿集

ごあいさつ

嘉麻市は、平成18年3月末に山田市・稲築町・碓井町・嘉穂町の1市3町が合併して出来上がった新市で、その名前は、『日本書紀』の安閑2年(535)5月に、筑紫に穂波と鎌(後に嘉麻と書かれた)屯倉を置くという、歴史的事実がらに由来します。

当市は、標高986mの馬見山から流れ出る遠賀川の豊かな流れに育まれた実りの地であり、その恵まれた地勢をあらわすかのように、市内の各所には、祖先たちの豊かな暮らしを示す数多くの遺跡が残されています。嘉麻市も含め嘉穂・田川両地域が位置する遠賀川上流域の特長は、地理的に福岡県のほぼ中央にあることから、歴史的に筑前と豊前両地域を結ぶ位置として、さらに広域的な見方をすれば北部九州において中国大陸・朝鮮半島から玄界灘沿岸を含む西の文化と近畿・瀬戸内方面からの東の文化が交差する内陸交通の要衝の地といっても過言ではないでしょう。

ただし、東西文化を結ぶ道は、北に下る遠賀川水系の流路以外いずれも峠をもって接していて、一見困難な壁と解釈されます。しかし、前近代・近代を通じ、そこに暮らす人々には、ごく日常的な生活の一部となっていました。もっとも、峠を文化交流の障壁と見なすのは現代人の利便的な考え方なのでしょう。

今回、嘉麻市と深くかかわる「ミヤケと渡来人」をテーマに据え、地域史の視点にたって古代の文献史学から、考古学と文献資料から、考古学における韓日交渉から、という3つの方向からそれぞれ考察を加えていただき、従来の「ヤマト王権による地方支配とその強化」という「ミヤケ」の解釈について再検討を行なうものです。

本シンポジウムを開催するにあたり、ご多忙の折にご講演を快諾いただきました先生方、並びにご協力を賜りました関係機関の皆様方に心より御礼申し上げます。

平成24年11月10日

嘉麻市教育委員会
教育長 栗野良一

趣 旨 説 明

福岡県のほぼ中央を南北に貫流する遠賀川の流域は、原始・古代においては中国大陸、朝鮮半島から玄界灘沿岸域を経て伝わる西方の文化と瀬戸内海を通じて近畿圏からもたらされる東方の文化が交差する地域でもありました。本シンポジウムのテーマとした「ミヤケ」と「渡来人」はそれぞれ「東」と「西」を象徴するキーワードだということもできるでしょう。

『日本書紀』安閑二年(535)の「ミヤケ」設置記事の中に、九州に設置された八つの「ミヤケ」の名称が記されています。このうち、遠賀川上流域に関わるものとして筑紫の「穂波屯倉」、「鎌屯倉」が、後の穂波郡・嘉麻郡の領域となる嘉穂盆地内に比定されています。また、諸説があるものの、豊国の「桑原屯倉」、「我鹿屯倉」の候補地として後の田河郡域にあたる田川盆地が挙げられています。これらの「ミヤケ」は、筑紫君磐井の乱後におけるヤマト王権の直轄地として、また磐井の勢力圏内に楔を打ち込んだ政治的・軍事的戦略の一つとして、一般に評価されることが多いようです。最多で4つの「ミヤケ」が置かれていた可能性がある遠賀川上流域についても、九州支配のための拠点としてヤマト王権がいかに本地域を重視していたかという評価を与えることができると思います。しかし、このような評価は中央史観による歴史的な理解であり、必ずしも豊かな地域の歴史を掘り下げるものとはならないようにも思えます。それどころか、こうした評価の影響から、「ミヤケ」が置かれたヤマト王権の支配地内では富の収奪のみが一方的に行なわれていたかのような印象をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。

このようなことを踏まえて、本シンポジウムでは、「ミヤケ」の意義を地域の視点から見直すことを大きな目的としたいと思います。「ミヤケ」が置かれた地域は、ヤマト王権の直轄地として富の収奪が行われる一方で、「ミヤケ」が設置されたことが契機となって、人・もの・情報の流れが活性化する側面もそこにはあったのではないかと考えられます。「ミヤケ」の運営には中国大陸や朝鮮半島の先進的な知識・技能を有した「渡来人」が大きな役割を果たしたことが、文献史学を中心に指摘されてきました。本シンポジウムでも「ミヤケ」と「渡来人」との関係性を重視し、渡来文化が地域の活性化に与えた影響を考えてみたいと思います。

なお各論では、文献史学、日本考古学、韓国考古学のそれぞれの立場から、広域な視点で本テーマである「ミヤケと渡来人」にかかる発表をお願いしています。また討論では、遠賀川上流域をケーススタディとして取り上げ、周辺地域との比較を交えながら「ミヤケ」が6世紀の九州島に与えた多様な影響を掘り起こしていきたいと思っております。

● スケジュール ●

古代史シンポジウム – 第1会場（文化ホール）

10:00 開会あいさつ

10:10 趣旨説明

各論発表

10:20~10:50 「ミヤケの経営と渡来人」 田中 史生（関東学院大学）

10:55~11:25 「ミヤケと北部九州の遺跡」 桃崎 祐輔（福岡大学）

11:30~12:00 「磐井の乱前後の韓日交渉」 朴 天秀（韓国・慶北大学）

休憩

討論

13:15~15:15 「遠賀川流域のミヤケと渡来人について」

司会：松浦 宇哲（嘉麻市教育委員会）

15:20 閉会あいさつ

平成22・23年度筑豊地区発掘調査速報会 – 第2会場（ロビー）

12:40~13:10 第1回速報会

15:30~16:00 第2回速報会

速報会は、ポスターセッション形式でおこないます。

● 本文目次 ●

「ミヤケの経営と渡来人」	田中 史生（関東学院大学）	1
「ミヤケと北部九州の遺跡」	桃崎 祐輔（福岡大学）	11
「磐井の乱前後の韓日交渉」	朴 天秀（韓国・慶北大学）	21
「筑豊」のミヤケと渡来文化	松浦 宇哲（嘉麻市教育委員会）	31

ミヤケの経営と渡来人

関東学院大学 田中史生

はじめに

『日本書紀』においてミヤケの設置を伝える最も早いものは、垂仁27年条の「是歳、屯倉を来目邑に興す」とある記事で、『書紀』編者はそこに「屯倉、此を彌夜氣と云う」という註記を付している。ミヤケという呼称は、生産・所有の機能を持つ首長層の経営拠点・単位としての「ヤケ」(宅・家)に接頭語の「ミ」(御)をつけたもので、王権と貢納・奉仕関係を結んだヤケがミヤケとなる。また、ミヤケは「屯倉」の他、「官家」「御宅」「三家」などと様々に漢字表記されたが、このうち、「屯倉」はミヤケの倉に注目した表記、「官家」は貢納・奉仕の拠点たる官衙を意味する表記とみられる。そして、こうしたミヤケの経営に、渡来系の人々も様々に関与していた。

ところでこれまで、ミヤケの性格をめぐっては、その本質を王権の土地支配、領域支配に求める見解と(平野1985・鎌田2001など)、土地支配に限定されないより多様な目的を持っていたとする見解などがあり(山尾幸久1977・館野和己1978など)、定説をみない。ただしいずれの場合も、ミヤケを「ヤマト王権の直轄領」「地域に打ち込んだ王権の楔・支配の象徴」と評し、王権の地域社会に対する直線的・直接的な支配を強調する点で共通している。けれども、ミヤケは、その設置された地域と王権とを一直線に結びつけていたのではない。『播磨国風土記』飾磨郡条に、瀬戸内の飾磨御宅と山陰の首長との関係が伝えられるように⁽¹⁾、地域と地域を結ぶ役割もあった。各地のミヤケが互いに結び付き、王権を核とする広域的な地域間ネットワークが築かれていたのである(図1)。本報告では、こうしたミヤケと地域社会の多様な関係を、ミヤケと渡来人・渡来文化との関係から具体的に捉えてみたいと思う。

1. 那津官家のネットワーク

記紀は垂仁紀以降、仁徳期前後のミヤケ設置を伝えるが、これらは経営内容に関する記述に具体性が乏しく、5世紀に遡るミヤケの実態は不明である。しかも、天皇の仁政を強調するための付加や、後世のミヤケとかかわる話を古く遡らせたとみられる記事も多く、その史実性は疑問とされている(仁藤2012)。一方、後の律令国家の地域支配(評制・郡制)へとつながるミヤケ設置の記事は6世紀から確認できるようになる。その信頼できる最も早いものは、磐井の乱後の『日本書紀』継体22年12月条の糟屋屯倉設置記事とされる。以後、九州でも『書紀』において次のようなミヤケ設置の記事が登場する。

継体21 527(530?) 磐井の乱勃発

継体22 528(531?) 磐井の乱鎮圧。息子葛子、連座を恐れて糟屋屯倉を献上。

安閑02 535? 筑紫に穂波・鎌、豊国に麩碕・桑原・肝等・大抜・我鹿、火国に春日部、播磨国に越部・牛鹿、備後国に後城・多禰・来履・葉稚・河音、婀娜国に膽殖・膽年部、阿波国に春日部、紀国に経湊・河邊、丹波国に蘇斯岐、近江国に葦浦、尾張に間敷・入鹿、上毛野国に緑野、駿河国に稚贄の各屯倉を置く。

宣化01 536? 河内国の茨田郡屯倉、尾張国の屯倉、新家屯倉(伊勢)、伊賀国の屯倉の穀を

運ばせ、那津の口の官家を修造。筑紫・肥・豊の三国に散在する屯倉を分かち移し、那津の口に建物を建てて集め、永く非常に備える。⁽²⁾

上記のうち、安閑2年の5月甲寅条に列挙された全国計26のミヤケは、6世紀半ば頃に置かれたミヤケを、『書紀』編者がここに一括掲載したものとされている。しかし26のミヤケのうち22ものミヤケが西日本に集中し、しかもその大半が瀬戸内地域と、磐井の勢力下にあった筑紫・豊・火に置かれていることから、全体としては、磐井の乱後の王権による地域支配強化とかかわるとする見方が有力である。さらに宣化元年の5月朔条は、筑紫・肥・豊の三国に分散するミヤケの機能の一部を那津官家に集中させたとあり、安閑2年紀の九州のミヤケは、最終的に対外的要地に置かれた那津官家を核とするミヤケのネットワークに組み込まれたと考えられている。こうしたことから、6世紀におけるミヤケ制の導入・整備は、磐井の乱に発露する倭王権の対外的な危機が大きな契機となったとする理解は、研究者の間に、ある程度共有されているといつてよい(石母田1971・山尾1999・仁藤2012など)。

以上の通説的な理解を踏まえつつ、宣化元年紀の那津官家の修造に関し、九州やその近国ではなく、河内や東海地域といった遠方に位置するミヤケの穀が用いられたと記されていることに注目したい。これらは、河内の茨田郡屯倉が阿蘇仍君によって、尾張国屯倉が大臣の蘇我稲目のもと尾張連によって、伊勢の新家屯倉が大連の物部麿鹿火のもと新家連によって、伊賀国屯倉が大夫層の阿倍臣のもと伊賀臣によって、それぞれ運搬されたという。これによれば、那津官家に稲穀を拠出したミヤケは、河内を除き、いずれも東海地域に位置し、ヤマトで大王に近侍する有力群臣層がミヤケの所在する現地の首長を動かして行われた。このうち、群臣層がわざわざこれに関与しているのは、那津官家修造のため、遠方のミヤケから臨時に稲穀を運ぶという王権あげての大事業であったことによるとみられる(『大宰府市史・古代資料編』2003)。ところが、そのなかにあつて、茨田郡屯倉だけは大阪湾岸地域に位置し、群臣層の直接関与がみられない。しかも、この茨田郡屯倉の穀を運んだ阿蘇仍君は、阿蘇を本拠とする阿蘇君のこととみられるから、ミヤケ所在地の在地首長でないことも他と異なっている。

こうした相違については、まず、茨田郡屯倉そのものの、他のミヤケと異なる特殊性・先進性に留意しなければならないだろう。すなわち、ヤマトと瀬戸内・九州地域をつなぐ水上交通の要地に位置する茨田郡屯倉は、西日本の他のミヤケの経営にも直接的な影響を与えるミヤケであった。例えば『播磨国風土記』揖保郡条は枚方里に関し、茨田から漢人の移住があつたことを伝えていて、これらは茨田郡屯倉とかかわる渡来系の移住を伝えたものと考えられている(館野1992)。しかも茨田郡屯倉は、他のミヤケと異なり「郡」字を含んだ「コホリノミヤケ」と称されたく、これは、茨田郡屯倉が渡来系の人々を編成して先進的な経営を行っていたことを示している。「コホリ」とは本来渡来系集団の編成単位の呼称であるが、ミヤケにおける「コホリ」の編成では編戸造籍がともなつたことが指摘されている(鎌田2001)。茨田郡屯倉の場合は、5世紀以来茨田の開発にあつてきた渡来系の人々が、6世紀以降、秦氏によってミヤケのもとに編戸・再編されて、「茨田ノコホリノミヤケ」が成立したと考えられる(田中2002)。このように、茨田郡屯倉は、渡来系の人々を編成した先進的な経営を行い、瀬戸内海を介して西日本のミヤケにも影響を与えた、王権にとって中核的なミヤケであつたとみられる。

したがって、阿蘇仍君の茨田郡屯倉の関係も、こうした茨田郡屯倉の特殊性とかかわる可能性が高い。この問題と関連し、留意すべきは、阿蘇仍君の本拠地となる火国に、安閑2年紀によって春日部屯倉があつ

たことが確認されることである。春日部の名称を冠するミヤケは、同条内でも他に阿波国にみえるが、「春日部」は安閑の皇后の春日皇女にかかわる部民とみられ、春日皇女のために上総に伊甚屯倉が設置された際は(安閑紀元年4月癸丑朔条)、耕作民が春日部として編成されたことも指摘されている(仁藤2012)。火国の春日部屯倉も、この春日部の管理とかかわるものとみられる。しかも、春日部屯倉を含む安閑紀2年の筑紫・肥・豊三国の屯倉は、那津官家に統轄されることになるから、那津官家修造とかかわり火国の首長の阿蘇仍君が登場するのは、彼が火国の春日部屯倉と関係していたことによるだろう。すなわち、那津官家の修造にかかわった阿蘇仍君は、那津官家が統轄することとなった春日部屯倉の経営にもともととかかわっていて、ヤマトとの貢納・奉仕関係を結ぶなかで、以前から瀬戸内海ルートのヤマト側の拠点となる河内の茨田郡屯倉とも関係を持っていた可能性が想定されるのである。

しかも、東海のミヤケの稲穀も、瀬戸内海ルートで那津まで運ばれたはずであるから、そのなかで唯一河内に所在する茨田郡屯倉から稲穀輸送があったとするのは、それらの運搬に茨田郡屯倉がかかわっていたことを示唆している。その際、東海地域のミヤケと茨田郡屯倉との間に恒常的な交流関係がなかったことで、群臣層の臨時的な関与が必要とされたのだろう。すなわち、群臣層の関与によって東海地域の在地首長が運び出したミヤケの稲穀は、一旦河内の茨田郡屯倉に集められた。それを、九州と河内のミヤケ間交通にかかわり、那津官家の修造にもかかわっていた阿蘇仍君が九州へ運んだと考えられる。

以上のように、那津官家修造に関して瀬戸内海交通が重要な意味を持っていたとすると、史料には示されないが、安閑2年にみえる瀬戸内地域のミヤケも重要な役割を果たしていたとしないならならぬだろう。そもそも安閑2年紀にみえるミヤケは、その大半が後の古代道とも重なるように、交通を強く意識した配置である。しかもその大半は、西日本の瀬戸内から周防灘・玄界灘へと至る、糟屋屯倉・那津官家までの水陸交通ルート上の要衝にある(図2・図3)。河内の茨田郡屯倉から那津官家まで、これらのミヤケを経由した可能性は高い。にもかかわらず官家修造に関し、那津から離れた河内・東海のミヤケの稲穀運搬方法だけが具体的に記されたのは、これが通常のミヤケ間交通と異なる、前述の群臣層を直接かかわらせた特殊な運搬方法をとったからではなかろうか。

2. 王辰爾系渡来人の文字技術と韓国木簡

ところで、渡来系の人々がミヤケにかかわったのは、彼らの持つ先進的な技術がミヤケ経営に有効であったからとみられる。それは考古学も留意する生産技術や土木技術などを含むが、6世紀以降のミヤケの「先進性」を考える上で特に留意されるのは、文字技術の問題である。例えば、先に茨田郡屯倉に関し、6世紀に渡来系の人々をミヤケのもとに編戸する先進的経営がなされていたことを述べたが、この編戸は渡来の文字技術の導入によってはじめて可能となったものである。こうした文字技術の一端は、『日本書紀』では王辰爾系渡来人の伝承に具体的にあらわれる。

『書紀』欽明14年(553)7月甲子条

樟勾宮に幸す。蘇我大臣稻目宿禰、勅を奉りて王辰爾を遣わして、船賦を数え録す。即ち王辰爾を以て船長とす。因りて姓を賜ひて船史とす。今の船連の先なり。

上記の記事は、欽明大王が樟勾宮に行幸した際、王辰爾が「船賦」を数録したというものである。王辰爾は、その出自に曖昧な部分もあるが、百濟から新たに渡来した実在の文字技能者であったと考えられる

(田中2005)。ここで樟勾宮の名称は、クス(樟・楠)と川の屈曲を意味する「勾」に由来するとみられ、現在の大阪府枚方市楠葉付近に比定される(和田2000)。すなわちそこは淀川旧流路東岸に位置し、このすぐ北側に諸河川の合流地点を抱えた水上交通の要衝であった。そして「樟勾」という名称から、おそらくここは、その上流で切り出され河川を使って運ばれたクス材が、河川屈曲部に貯木されるような場所だったと推定される。

『書紀』の記事によれば、この欽明による樟勾宮行幸は、百済が高句麗から奪還した漢城をめくり新羅との対立を激化させ、倭国へ援軍を求めて、欽明がそれに応えることを決意した直後に行われている。この時倭国が準備したものは、兵1000と馬100匹、船40隻であった。ここで、倭船がクス材を用いて造られていたことに注目すると、百済への援軍派遣を決意した直後の欽明の樟勾宮行幸が、軍船用のクス材などの軍事物資調達と深く関係したものであったことが了解されよう。すなわち百済から渡来したとみられる王辰爾は、ここで淀川水系を利用し運ばれる軍事物資を「数録」する作業を行っていたと推定できる(田中2008)。

さらに『書紀』は辰爾の甥と伝えられる膽津についても、白猪屯倉における彼の活躍を通し、百済から渡来した文字技術に関して以下のような興味深い伝承を掲載している。

『書紀』欽明30年(569)正月辛卯朔条

詔して曰く「田部を量り置くこと、其の來ること尚し。年甫めて十余、籍に脱れ課を免れる者衆し。宜しく膽津〈膽津は、王辰爾の甥なり〉を遣わして、白猪田部の丁の籍を檢定せしむべし」

『書紀』欽明30年(596)4月条

膽津、白猪田部の丁者を檢閲し、詔に依りて籍を定む。果たして田戸を成す。天皇、膽津が籍を定めし功を嘉して、姓を賜ひて白猪史とす。尋ち田令に拜し、瑞子が副とす。

上記の白猪屯倉は『書紀』によれば欽明16年(555)7月に「吉備五郡」にはじめて置かれた。また、最後にみえる瑞子とは、『書紀』欽明17年(556)7月己卯条に、児島屯倉の田令としてみえる葛城山田直瑞子のことである。児島屯倉と白猪屯倉については、これを同一とみるか否かで見解が分かれるが、白猪屯倉において田部の「丁籍」を檢定し田令に任じられた膽津が、児島屯倉の田令瑞子の「副」とされている以上、両屯倉が密接な関係にあったことは間違いない。そして、この児島屯倉が来倭した倭系百済官人日羅の宿亭・慰労の場となったことを考えるならば(『書紀』敏達12年是歳条)、この両ミヤケには、瀬戸内海交通を前提とした対外的機能も備わっていたと推定することができる。

以上のように、辰爾や膽津の活躍伝承からは、6世紀中葉、水系を利用した物流ネットワークの構築を前提に、そこから物資・労働力を調達し、それを記録・管理する文字技術が、百済から伝来していたことが推察されるのである。

そして、近年報告事例の増えた6世紀の韓国木簡は、こうした王辰爾系渡来人のもたらした文字技術を考える上でも示唆に富む内容を含んでいる。

まず、6世紀中葉以前の百済木簡と推定される扶余の陵山里木簡において、日毎の食米支給を記録した次の4面木簡が確認された。

[1面] □支藥兒食米記 初日食四斗 二日食米四斗小二升一 三日食米四斗…

[2面] 五日食米三斗大升一 六日食三斗大二 七日食三斗大升二 八日食米四…

[3面] 食道使□□次如逢□猪耳其身者如黑也道使復後弾耶方…

[4面] 「石二十又石二十又石二十又石二十石二十又石二十又石二十又…

この木簡は第1面冒頭に「支葉児食米記」と記し、そのあと第2面までの間に日毎の食米支給を記す。また第3面には、百済地方官の職名「道使」や、「其身者如黒也」という「身」の特徴に関する記載がある。尹善泰氏は、1～2面が「支葉児」に支給した食米を記録した「支葉児食米記」と呼びうる帳簿、3面が「職名(あるいは地名)+人名」の形式で人を羅列し、その身体的特徴や関連事項を記した帳簿と推測する(尹2007)。ここには、百済系の辰爾が行った「数録」と同様の作業が、同時期の百済木簡にあらわれている。しかもこうした日毎の食米支給を記す木簡は、7世紀以後の日本でも広く確認され、日本への継受も確認できる。

また、陵山里の299号木簡は、用途不明ながら、以下のように横界線を入れた四段書きで二文字が書き連ねられている。

三貴	至女	今母	只文
丑牟	至文	安貴	翅文
□□	□貴	□□	□□

これらは人名とみられ、その背景に膽津の「丁籍」作成技術にもつながりうる名帳の存在が想定しうる。さらに、断片として残る同307号木簡で確認された「資丁」の文字からは、6世紀の百済で「丁」の労働力編成が文字を用いて行われていたことも窺える。『周書』百済伝によって、6世紀の百済には戸口の管理・徴発を行ったとみられる「点口部」が置かれたことが知られていたが、その管理・運用の際に木簡が使われた可能性は高いだろう。

一方、新羅においても、辰爾らのもたらした文字技術に通じる同時期の木簡として、慶尚南道咸安郡の城山山城木簡をめぐる研究が注目される。すなわち、当該木簡の中核をなす荷札木簡については、新羅の加耶攻略拠点咸安への洛東江水系を利用した労働力・物資等の調達実態が示されているとの指摘や、洛東江を利用した物資集積拠点間のネットワーク・新羅物流システムが示されているとの指摘があり、これらが前述の文字技術を用いた辰爾系渡来人の活躍内容と重なるからである。しかもこのことは、新羅城山山城木簡と類似の文字技術を、同時期の百済も保持していた可能性を示唆することになる。

3. 地方の文字受容とフミヒト —滋賀県西河原遺跡出土木簡から—

加藤謙吉氏によれば、6世紀半ば以降に渡来系の文字技術者として編成されたフミヒト組織は、一般に「史」の姓を持つ氏族を形成し、まずは近畿やその周辺の、交通の要衝に配置された(加藤2002)。先の辰爾や膽津はこうした組織を担った初期の人物とみられるから、6世紀後半の倭国は、大王宮・王子宮へとつながる重要な物流拠点に渡来系文字技能者を配置し、一部の地方でようやく文字を用いた管理・支配が始まった段階にあったと考えられる。また、膽津の伝承に示されるように、彼らフミヒトらは各地に置かれたミヤケと密接な関係にあったとみられるが、ミヤケ制の列島各地への拡大は6世紀末から7世紀初頭以降で、同時期の福岡県や滋賀県、石川県などで確認される渡来人居住の痕跡には、ミヤケ経営と渡来人の関係を示唆する考古資料が含まれていると考えられる(田中2002)。

この問題とかかわり、近年、滋賀県野洲市西河原宮ノ内遺跡で確認された、倉庫とみられる総柱建物の柱抜取穴から出土した木簡が注目される。木簡は倉庫を撤去する際に生じた柱抜取穴に一括投棄されたものとみられ、文字の判読できるものは5点ある。本報告とかかわる木簡のみ以下に掲げる。

○3号木簡

- ・「[]
□田二百斤 □□
[]」
- ・「三寸造廣山『三□』
壬寅年正月廿五日
勝鹿首大国『□□』。」

○4号木簡

- ・「辛卯年十二月一日記宜都宜椋人□稻千三百五十三半記°」

○6号木簡 [十カ]

- ・×刀自右二人貸稻□斤稻二百斤又□斤稻卅斤貸°」
×人佐太大連
- ・二人知 文作人石木主寸文通。」
×首弥皮加之

以上のうち、年紀を持つ最も古い木簡は4号木簡の辛卯年(691)、最も新しいものは3号木簡の壬寅年(702)である。これらの木簡はいずれも解体された倉庫とかかわる出拳の木簡とみられること、6号木簡の「文作人石木主寸文通」は当該木簡の文面作成者であること、4号木簡の「宜都宜椋人」の「椋人」はクラの管理者であることを暗示した姓もしくは個人名とみられること、「宜都宜」の「宜」は古韓音の「ガ」と読むべき文字で、3号木簡の「勝鹿首」を表記していることなどが指摘されている(市2010)。

さて、西河原宮ノ内の木簡では、6号木簡の作成者を「文作人」と表記しているが、ここにみえる石木主寸文通は東漢氏に属する渡来系氏族である。西河原遺跡群の光相寺遺跡からは、渡来系との関連が想定される大壁造り建物跡も検出されている。また、6号木簡の「文作人」は韓国の新羅真智王代戊戌年(578)の「大邸戊戌銘塲作碑」にみえる「文作人」と一致しており、これはフミヒトの職掌を示す古い用例とみられる。この他、6世紀の新羅碑には文書作成者として「書人」を用いる例もあるが(丹陽新羅赤城碑など)、それは6世紀後半の百済昌王からの技術供与による飛鳥寺創建のことを記した『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』所引「塔露(覆)盤銘」に「書人百加博士・陽古博士」とあることとも通じる。西河原の木簡や「塔露(覆)盤銘」は、7世紀以前の倭国において、渡来系の文字作成者を「文作人」「書人」といった百済や新羅で使われていた表記を用いて記す場合があったことを示している。すなわち、西河原宮ノ内の木簡は、ここに古韓音の使用されていることからみても、渡来系の文字技能者、つまりは渡来系フミヒトの影響が想定しうるのである。

この観点からは、日本の木簡では比較的早い時期に属する7世紀～8世紀初頭の地方木簡に、「クラ」の意味で「椋」字が使用されていることも注目されるだろう。この「椋」字が朝鮮半島起源の文字であることはこれまでも指摘されており、なかでも新羅の出土文字資料との一致から特に新羅の影響が想定され

てきた。しかし、著名な『周書』百濟伝の「内椋部・外椋部」の記載にとどまらず、扶餘陵山里300号木簡に「三月仲椋内上勅」とあったことから、「椋」の用例が6世紀の百済にも存在したことが確実となり、新羅だけでなく、百済からの影響も想定されるべきである。

ここで、あらためて西河原宮ノ内遺跡出土木簡をみると、4号木簡の古韓音で表記された「宜都宜椋人」が留意される。「椋人」が姓であれば、それは『新撰姓氏録』右京諸蕃上に「椋人、阿祖使主(阿智使主)か男、武勢之後也」とある、おそらくはクラの管理にかかわった渡来系の姓との関連が想定されるし、人名とみる場合も、「文作人」の石木主寸文通の名が「文作人」と結びつく「文通」を称すように、やはり彼のクラに対する職掌と密接なかかわりを持つと解される。すなわち当地の出挙には、「椋」の管理者とフミヒトがかかわっていたことが推測される。このことと関連し注目されるのが、やはり西河原遺跡群に属する森ノ内遺跡から出土した、次の2号木簡である。

○ 西河原森ノ内2号木簡

- ・「椋□伝之我持往稻者馬不得故我者反来之故是汝トア」
- ・「自舟人率而可行也 其稻在処者衣知評平留五十戸旦波博士家」

この木簡は里を「五十戸」と表記するから、天武10(681)年代以前の木簡で、内容は、稲を運ぼうとして馬を得られなかった「椋」が、ト部に対し舟人を率いてこれを運搬するよう指示し、その稲は「衣知評平留五十戸」の旦波博士の家にあることを記したものである。その運搬先は、本木簡が出土し、倉庫もあった西河原遺跡の可能性が高い(市2010)。

木簡冒頭の「椋」字の下の文字は「首」なのか「直」なのか判断し難いが、椋首もしくは椋直は「椋」にかかわる職掌を持つ氏族出身者とみられ、しかも木簡の内容からみて、稲の保管・運搬に関し指示を出しうる権限を持つ立場にあったとみられる。

一方、その稲を保管していた旦波博士は渡来系志賀漢人一族の大友但波史氏で、「衣知評平留五十戸」は、現彦根市稲里の湖辺に比定される。この旦波博士のようにフミヒトの「史」を「博士」と表記した例は、甲午年(694)の年紀を持つ法隆寺蔵観音菩薩造像記銅板や藤原宮木簡などが知られるが、特に前者の場合は、その氏族の出自までが記されていて、そこでは「族大原博士、百済在王、此土王姓」と、百済出自を称していた。一方、先の「塔露(覆)盤銘」は、造瓦・造寺技術者らを「寺師」「鏤盤師」「瓦師」などと「師」で称しながら「書人」のみ「博士」を付して称しているから、ここでも「書」「画」の技能者を百済では特に「博士」と呼んだことが窺われる。この点、『三国史記』百済本紀の近肖古王30年(375)条が、「古記」を引用して、「博士高興」が文字の無い百済に「書記」の技術をもたらしたと伝えることも参照されてよい。旦波博士がフミヒトであったことは間違いない。

また西河原森ノ内2号木簡によれば、この旦波博士の「家」に、椋首もしくは椋直が管理し西河原遺跡群の倉庫に運ばれるべきまとまった量の稲があることから、旦波博士は椋首もしくは椋直のもとにあって、その「家」も、西河原遺跡と連携した農業経営の拠点の一つとなっていたとみて良いだろう。しかも、西河原遺跡群の倉庫まで、稲の運搬手段として馬・舟の二つの方法があったから、両地は、水陸双方の交通により結ばれていた。加えて、西河原森ノ内遺跡からは布の生産もしくは徴収に関する木簡が出土しており(3号木簡)、その他、西河原遺跡群からは農具だけでなく、鍛冶関連遺物が出土し、鏡山古窯址群で生産された須恵器の集散地ともなっていたから、稲が集積された西河原遺跡群は、地域の多様な生産・物

流の拠点として機能していたとみられる。すなわち、西河原遺跡とその周辺の生産拠点は、水陸交通で結ばれ、そこにおいて「棕」の管理者のもと、渡来系フミヒトが活躍していたということになる。それは、水系も意識しネットワークを形成する6世紀の吉備のミヤケ経営において、田令葛城山田直瑞子の副にフミヒト膽津が任用されていたことと類似している。こうしたことから当遺跡は、安閑紀2年にみえる葦浦屯倉の経営形態を引き継いだ、評家・郡家関連遺跡である可能性が高い。

ここで西河原遺跡群を離れ、他の7世紀～8世紀初頭の日本木簡をみても、前述の山垣遺跡や福岡県小都市井上薬師堂遺跡において、西河原と同様、「棕」を拠点とした出拳の実態を示す木簡が確認されている(三上2005)。しかも山垣遺跡出土木簡には渡来系の秦人部が多く登場するし、井上薬師堂遺跡の周辺にも7世紀に入って渡来人の居留が推定できる遺跡が複数確認されているから、これらがそれ以前のミヤケ経営を引き継いでいた可能性は高い。「棕」とかかわりを持つ出拳木簡の様態は、ミヤケにおけるクラごとの出拳の運用を推定する説(吉村1981)とも重なる。

以上のことから、日本の早い時期の地方木簡に登場する「棕」字は、朝鮮半島から渡来したフミヒトら文字技能者が各地のミヤケ経営に関与したことを起源とする可能性が浮上する。そして現在確認されている7世紀後半以降の日本の出拳木簡も、それ以前のミヤケのクラにおける運用を引き継いだ面があったとみられるのである。地方への文字技術の伝播が7世紀前半以前に遡ることは、飛鳥時代に属する中空円面硯の出土などからも明らかで、地方にまで広がる文字文化の起点は、このミヤケの段階にまで遡るとみなして良いだろう。

む す び

以上のように、6世紀の韓国木簡、7世紀の日本の地方木簡には、渡来系の人々がミヤケにおいて駆使した先進的な文字技術の一端が示されている。そこからは、地域の生産・交通・物流拠点といった、ミヤケの地域社会と結び付いた多様な機能も浮かび上がる。律令国家の地方支配も、それ以前のミヤケを介して各地へ拡散・定着した渡来文化を基礎としていたのである。

王権の支配拠点としての意義が強調されがちなミヤケだが、それが地域に置かれ機能したという前提に立つとき、今後、その「支配」の意義が王権側のみならず地域社会の側からも読み解かれる努力が必要であろう。

【注】

- (1) 『播磨国風土記』飾磨郡条に「飾磨御宅と稱ふ所以は、大雀の天皇の御世、人を遣わし、意伎・出雲・伯耆・因幡・但馬の五つの国造等を喚したまひき。是の時、五つの国造、即ち召の使を以て水手と為し、京に向かひき。此を以て罪と為し、即ち播磨国に退いて、田を作らしめき。此の時作れる田を、即ち、意伎田・出雲田・伯耆田・因幡田・但馬田」と号す。即ち、彼の田の稲を収納する御宅を、即ち飾磨御宅と号し、又、賀和良久の三宅といふ」とある。
- (2) 『日本書紀』宣化元年5月朔条に「詔して曰く『食は天下の本なり。…夫れ筑紫国は、遯く遯く朝で届る所、去来の関門にする所なり。是を以て、海表の国は、海水を候ひて来賓き、天雲を望みて貢奉る。胎中之帝より朕

身に泊るまでに、穀稼を収蔵し、儲糧を蓄へ積みたり。遙に凶年に設け、厚く良客を饗す。国を安みする方、更に此に過ぐるは無し。故、朕、阿蘇仍君 未詳也 を遣わして、加、河内国の茨田郡屯倉の穀を運ばしむ。蘇我大臣稲目宿禰は、尾張連を遣わして、尾張国屯倉の穀を運ばしむべし。物部大連麁鹿火は新家連を遣わして、新家屯倉の穀を運ばしむべし。阿倍臣は、伊賀臣を遣わして、伊賀国の屯倉の穀を運ばしむべし。官家を、那津の口に修造せよ。又其の筑紫・肥・豊三国の屯倉、散れて縣隔に在り。運び輸さむこと遙に阻れり。儻如し須要いむとせば、以て率に備へむこと難かるべし。亦、諸郡に課して分かち移して、那津の口に聚め建てて、以て非常に備え、永く民の命とすべし。早く郡縣に下して、朕が心を知らしめよ』とのたまふ」とある。

【参考文献】

- 市 大樹 2010 『飛鳥藤原木簡の研究』 塙書房
- 加藤 謙吉 2002 『大和政権とフミヒト制』 吉川弘文館
- 鎌田 元一 2001 『律令公民制の研究』 塙書房
- 国立扶余博物館 2007 『陵寺』(遺蹟調査報告書13冊)
- 国立扶余博物館 2008 『百済木簡』。
- 滋賀県立安土城考古博物館 2008 『古代地方木簡の世紀』 滋賀県立安土城考古博物館第36回企画展図録
- 太宰府市史編纂委員会 2003 『太宰府市史・古代資料編』 太宰府市
- 館野 和己 1978 「屯倉制の成立」 『日本史研究』 190
- 館野 和己 1992 「畿内のミヤケ・ミタ」 『新版 古代の日本』 、角川書店
- 田中 史生 2002 「ミヤケの渡来人と地域社会」 『日本歴史』 646
- 田中 史生 2005 『倭国と渡来人 - 交錯する「内」と「外」 - 』 吉川弘文館
- 田中 史生 2008 「六世紀の倭・百済関係と渡来人」 『百済と倭国』 高志書院
- 仁藤 敦史 2012 『古代王権と支配構造』 吉川弘文館
- 平野 邦雄 1961 「秦氏の研究」 『史学雑誌』 70 - 3・4
- 平野 邦雄 1985 「六世紀の国家組織 - ミヤケ制の成立と展開 - 」 『大化前代政治過程の研究』 吉川弘文館。
- 三上 喜孝 2005 「出挙の運用」 『文字と古代日本』 3、吉川弘文館
- 山尾 幸久 1977 『日本国家の形成』 岩波新書
- 山尾 幸久 1999 『筑紫君磐井の戦争 - 東アジアのなかの古代国家 - 』 新日本出版社
- 尹 善泰 2007 「木簡からみた百済泗泚都城の内と外」 『韓国出土木簡の世界』 雄山閣
- 吉村 武彦 1981 [「改新詔・律令制支配と「公地公民制」』 『律令制社会の成立と展開』 吉川弘文館
- 和田 萃 2000 「船氏の人々」 『文書と記録』 上、岩波書店

図 1

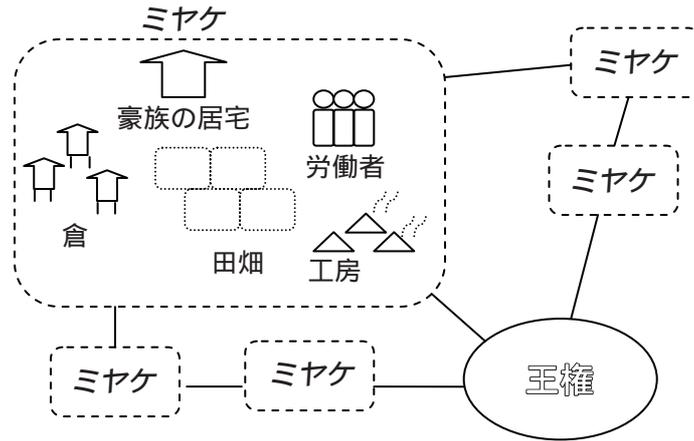


図 2

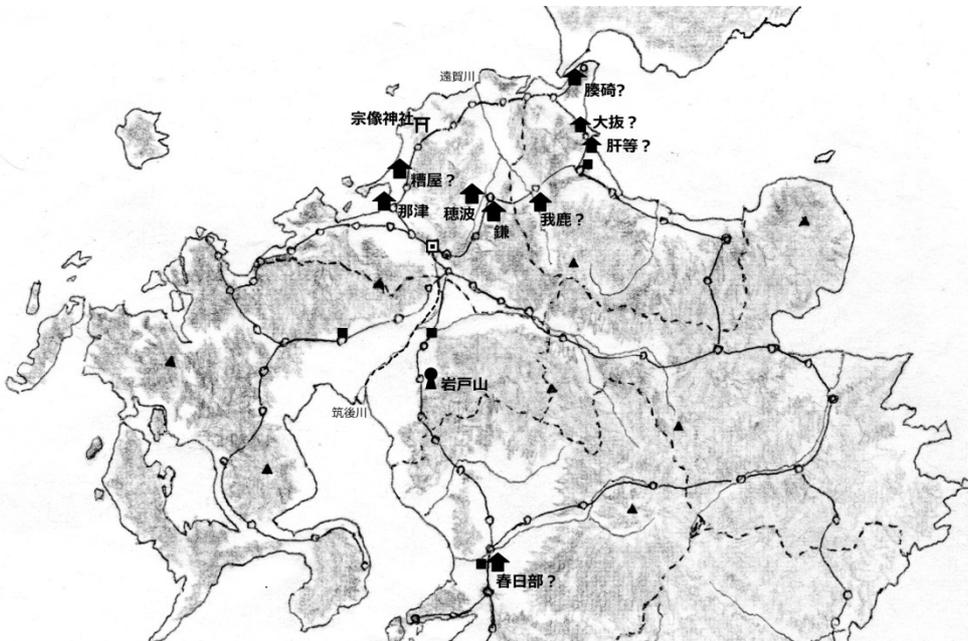
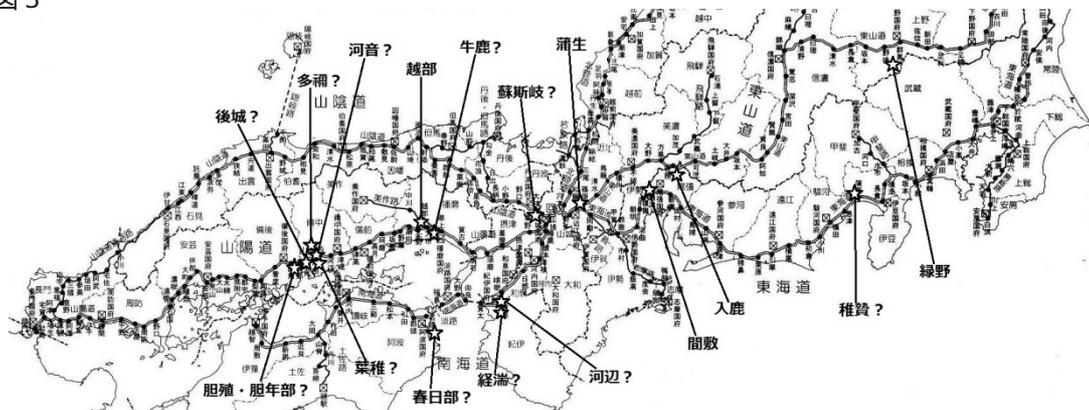


図 3



ミヤケと北部九州の遺跡

－ 那津官家・糟屋屯倉・大抜屯倉を中心に －

福岡大学人文学部歴史学科 桃崎祐輔

I 九州のミヤケを探索する

古墳時代、日本各地に、ヤマト政権の直轄支配地としてミヤケが置かれた。なかでも九州は、朝鮮半島への軍事活動のための兵糧や、海外からの外交使節をもてなす食糧備蓄の必要から、528年にまず糟屋屯倉が設けられ、536年には北部九州全体を統括する那津官家が設けられた。筑豊地域の屯倉は、那津官家に軍糧や物資を供給したと考えられる。しかし屯倉の地名を記すだけで説明がほとんどない。ミヤケの所在地を探索するには、様々な方法があるが、

まず第一は、『日本書紀』などの古文献に出てくる地名と、同じ地名をさがすことから始まる。大抜屯倉なら、貫、桑原屯倉なら、桑原、我鹿屯倉なら、赤といったように。

平安時代の初め頃の百科事典である『倭名類聚抄』には、当時の国ごとの郡や郷の名前の一覧が残され、ミヤケと同じ発音の三宅、宮家の名がついた郡郷名がある。

ミヤケには、水田耕作や精米にあたる田部、舂米部、倉庫を警備する犬飼部、海産物を貢納する海部や膳、製鉄や木炭生産、漆採集など山林資源にかかわる山部・漆部、祭祀や須恵器生産に関わる大神部・神部、馬を飼育する馬飼部など様々な職能部民が居住する。

平群や物部は中央氏族、壬生部、額田部は皇子や皇女の養育に携わる名代部と考えられる。

ミヤケに他地域の集団が入植すると、外来の石室や土器を使うムラが現われる。

ミヤケはヤマト政権の経済的基盤であるため、先進的な生産技術をもつ渡来集団が入植して製塩漁撈・須恵器生産・製鉄鍛冶を行う。また農地開拓のための水路や池が掘削される。

ミヤケには、穀物を備蓄する倉庫と、管理場の官衙的建物が営まれ、耕作や重量物輸送のための牛や馬の導入がはやく、牛馬骨や牛馬の足跡、木製馬具・馬鍬などが集中的に出土する。

ミヤケは古墳時代の終わりに廃止されるが、そのまま評に引き継がれ、また屯倉設置地域の近くに神籠石など古代山城が営まれることが多く、鎌屯倉と鹿毛馬神籠石の関係も要検討。

屯倉比定地の検討

- A. 具体的な比定地がほぼ確定し、関連遺跡や経営形態への議論がある那津官家・糟屋屯倉。
- B. 文献上に屯倉の存在が明示され、遺称地から比定地も絞り込まれているが、屯倉という視点での古墳や遺跡の考古地理学的検討が十分進んでいない穂波・鎌・大抜・我鹿屯倉。
- C. 文献上に屯倉の存在を明示するが、比定地に諸説ある膝碕・桑原・肝等・春日部屯倉。
- D. 屯倉の存在が有力視される地名・地籍を残しているが、裏付ける記事を欠く筑後国上妻郡三宅郷、筑後国三宅郡、日向君児湯郡三宅郷。
- E. 屯倉の指標となる三本柱柵の存在から未知の屯倉関連遺跡とみられる筑前町惣利遺跡。

II 北部九州のミヤケの実態

1 那津官家（なのつのみやけ）

那津官家は、磐井乱後の宣化元年（536）に、筑紫は去来の関門であるとして那津に官家を修造し、諸国に散在する屯倉から穀物を集積し、来航する外国使節と対外的な有事に備えたことに始まる。江戸時代より、その位置は福岡市南区三宅付近と推定されてきた。

(1) 屯倉関連遺構の検討

柳沢一男氏は、福岡市比恵遺跡の官衙的建物群が、倉庫群の規模・身舎面積が巨大で、遺構配置・構成が律令期の地方官衙に類似し、6～7世紀の遺物を伴い、ミヤケ関連地籍を含むことを根拠に、『日本書紀』宣化元年（536）五月条の「那津官家」の候補に挙げた（柳沢一男1987）。米倉秀紀氏は、比恵・那珂遺跡群や有田遺跡の三本柱柵に囲まれた総掘立建物群が同一のマスタープランのもと6世紀に建設され、数次の立て替えを経て7世紀後半の太宰府・大野城の建設頃廃絶するとした（米倉秀紀1993）。菅波正人氏は6世紀後半～末に比恵遺跡群で大型建物群が出現し、7世紀前半～中頃には中心が那珂遺跡に移動し、また初期瓦を葺く施設が存在が予想され、『日本書紀』推古17年（609）条に見える筑紫大宰と関係づけた（菅波正人1997）。

甲斐孝司氏は、総柱建物・三本柱柵こそミヤケ固有の特徴とみて、古賀市鹿部田淵遺跡の四重柵列を伴う6世紀の建物群を糟屋屯倉に関連する港湾管理施設とみた（甲斐孝司2000・2004）。

(2) 那津官家と首長系譜

那津官家中核部の東光寺剣塚古墳は、三重周溝をめぐらす前方後円墳で、6世紀中頃の須恵器、埴輪を伴い那津官家の管掌者の墓と推定される。今里不動古墳は、7世紀前半から中頃の築造で、福岡平野周辺では最大級の巨石横穴式石室を具え、京都大学所蔵の「伝金隈尾崎山」出土の心葉形忍冬文透彫杏葉は当古墳出土の可能性もある。

『古事記』神武記には、「筑紫三家（三宅）連」の名が見え、火（肥）君や阿蘇君と同族とされていることが注目される。『日本書紀』宣化天皇夏二年条（536）には、那津屯倉の設置にあたり、阿蘇君は大王の意向を受けて河内の茨田屯倉からの物の輸送に関与している。

以上より、阿蘇君一族が那津官家への軍糧輸送を管掌し、子孫が筑紫三宅連を名乗ったと考える。阿蘇溶結凝灰岩製の石屋形をそなえ赤色顔料を塗布する東光寺剣塚古墳は、肥後からの石材搬入が示す大規模海上輸送力から、阿蘇君一族 筑紫三宅連の祖の墓と考えたい。

(3) 職能部民と須恵器生産

那津官家の南方に広がる大野城市牛頸窯跡群では、6世紀中葉の野添支郡を上限とするため、渡辺正気氏は窯跡群の成立に那津官家設置が深く関わると考えた。536年、那津官家設置後まもなく物部大連麿鹿火が逝去し、北部九州は大伴金村とその子磐・狭手彦兄弟らが掌握した。大阪府の石津川流域に陶邑窯跡群があり、河口の堺市周辺が大伴氏の本拠地であったことから、那津官家設置時に大伴氏が陶邑工人を同伴したと想定した（渡辺1994・1995）。また岡田裕之氏は、6世紀中葉の東光寺剣塚の出現を「那津官家」=ヤマト政権の直接支配の開始とみなし、6世紀後半からの須恵器生産の拡大には部民制と屯倉制の役割を重視する（岡田2006・2007）。

大野城市牛頸本堂遺跡群第7次調査C区5層の灰原より、7世紀前半～中葉の甕に「大神部見乃官」と

へラ書きしたものが出土し、石木秀啓氏は、筑紫に派遣された「河内美努邑」(『古事記』にみえる陶邑の呼称)の大神部の関与を推定する(石木2008)。

大野城市牛頸八セムシ窯跡12地区深黒出土大甕破片には、「筑紫前國奈珂郡 手東里大神等身 并三人 調大釀一室和銅六年 」(713)とあり、他に「大神君 (百) 大神 麻呂 内椋人麻呂 并三人 奉 (調) 大瓦長一目」銘片がある。筑前の須恵器生産に、中央の祭祀氏族である大神 = 大三輪氏の関与や技術指導があったことを示している。

(4) 山部と鍛冶生産

福岡平野の南に聳える油山(569m)の山麓尾根一帯は、500基を超える古墳が密集する。5世紀後半代～6世紀前半の城南区梅林古墳など九州系の竪穴系横口式石室墳が現われ、朝鮮半島産の土器や金属製品をしばしば出土し、また鉄滓(鍛冶滓)供献が開始される。6世紀後半以降になると、横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が爆発的に営まれ、鉄滓供献がさかに行われる。最初は鍛冶滓が多かったが、6世紀末～7世紀代から製錬滓も加わる。これに呼応するように、群集墳は高所へ移動する。木炭生産のため森林の伐採が進んだためだろう。

油山山麓の群集墳は7世紀後半、家族墓から個人墓に変化し、小型埋葬施設や須恵器供膳具を副葬する土壌墓をもって終焉を迎え、毘伊郷衛とみられる柏原遺跡、能解郷衛と考えられる野芥遺跡の付属工房に生産の場が移ると考えられる。那珂川東岸の南区井尻B遺跡では、「寺」刻書須恵器、百濟系単弁軒丸瓦などとともに「山部評 豊評 」の刻字瓦が出土した。

南区柏原遺跡では、6世紀末以降、丘陵斜面を大規模に造成し掘立柱建物が営まれ、那津官家の段階から評里・郡郷段階まで続く拠点であったと考えられる。8世紀後半～9世紀前半の掘立柱建物、鍛冶炉24基、鞆羽口、鉄滓なども検出され、多量の越州窯青磁、石帯、硯、「郷長」「山守家」「田口」などの墨書土器群が共伴し、筑前国早良郡毘伊郷の郷長の居館址と考えられる。「山守家」の墨書は油山山林の管理と使用を公認された家柄であることを示す(板楠和子1996)。よって油山周辺の鉄滓供献古墳には、木炭生産や鍛冶製鉄に従事する「山部」が葬られたと考えられ、7世紀後半には「山部評」として把握されていた可能性が高い。

2 糟屋屯倉(かすやのみやけ)

『日本書紀』には、継体二十一年六月(527)に筑紫国造磐井が反乱を起こすも、翌年に敗北し、磐井の子葛子は連座をおそれて、糟屋屯倉を献上して死罪をまぬがれたと記されている。

(1) 糟屋屯倉と春米部

京都太秦の妙心寺鐘には「戊戌年四月十三日壬寅収糟屋評造春米連廣國鑄鐘」の銘があり、戊戌年 = 文武天皇二年(698)に「糟屋評造」の「春米連廣國」が鑄造させた鐘で、観世音寺鐘と兄弟鐘で、「郡評論争」の資料として名高い。「春米部」は臼で米を搗き大量の精米を製造して軍糧米を供給したと考えられる。糟屋の春米連は、磐井乱後に九州を管掌した物部氏が、糟屋屯倉の経営と軍糧輸送・備蓄を進めるため、河内茨田屯倉・摂津三島郡等から糟屋評設置に先立ち糟屋屯倉に入植させた秦氏系の集団の子孫と考えられる。

(2) 糟屋屯倉の領域と部民集団

糟屋屯倉の中核は、福岡市東区・粕屋町・篠栗町を中心とした多々良川流域・若杉山西麓に置く説と、

古賀市鹿部田淵遺跡を中心とした花鶴川流域・立花山北麓に置く説がある。上記二地域の狭間に、海人集団で海上交通と海産物貢納拠点としての志賀海人・阿曇氏の領域が挟まる。また宇美川流域でも「田部」刻書の須恵器など、屯倉との関連を示す資料がある。

若杉山麓の篠栗町中園古墳は、畿内的な左片袖類穹隆状天井の横穴式石室を主体部とし、糟屋屯倉設置時に入植した渡来系首長の墓とみられる。後続する長者隈古墳では新羅製の鞍金具が出土した。九州大学農場付近にある粕屋町鶴見塚古墳は、全長80m前後の大規模な前方後円墳で、『筑前国続風土記』には葛子の墓の伝承、石屋形を具える横穴式石室の記述がある。

花鶴川河口の花津留浦に接する古賀市鹿部田淵遺跡では、四重？柵列を伴う、総柱建物と側柱建物がコの字形に配置される6世紀後半の建物群が検出され、糟屋屯倉の関連遺跡とみられている。ただし倉庫の検出は2棟にとどまる(小田2003・甲斐2004)。太田町遺跡で、5世紀末～6世紀中頃の須恵器や子持勾玉とともに舶載の鑄造鉄斧2本が出土し、鉄素材の可能性もある。当地は鹿部田淵遺跡とは1km以内の距離にある。子持勾玉と鑄造鉄斧の出土は、宗像沖ノ島の祭祀遺跡や、飯塚市山の神古墳とも関係する。楠浦・中里古墳群では、装飾大刀3本のほか、4基の殉葬馬痕跡がみつきり、馬飼いや軍事集団の居住を示している。

宇美観音浦KS16号墳で「大宅(奄)？」、KS19号墳でトンボ形の銅製太刀鞘金具、7世紀後半の追葬時の「田ママ」刻書の須恵器が出土した。岩永浦支群では、6世紀後半～7世紀初頭前後の須恵器窯2基が営まれた。また正籠3号墳は、6世紀前半の築造で石室から3セット以上の馬具、大刀、墳丘から榮山江流域の陶質土器が出土した。

3 大抜屯倉(おおぬくのみやけ)

北九州市小倉南区の貫川流域、大貫・長野・曾根付近が、535年の設置を伝える大抜屯倉の比定地である。標高712mも貫山から派生する水晶山麓には須恵器窯址群が集中する。

(1) 大抜屯倉の設置と二つの首長系譜

北九州市小倉南区の曾根平野周辺には、10基余の前方後円墳が集中する。茶毘志山古墳(54m)、上山古墳(50m)、畠山古墳(44m)、両岡様1号墳(27m)があり、同一首長系譜とみられている。『日本書紀』雄略天皇十八年条(474?)には、物部目連に従って活躍した「筑紫の間物部大斧手」が見え、企救郡域に5世紀後半に築造された茶毘志山古墳と対応する。

ところが大抜屯倉設置時の6世紀中葉には、周防灘岸の海浜堤上に荒神森古墳(68m)が出現する。後続する丸山古墳は詳細不明だが、南側の円光寺古墳は6世紀末の須恵器・埴輪を伴い、墳丘は崩れ易い海砂を土留板や土嚢工法で盛り上げ構築している。更に南側にも埴輪を伴う円墳のシヨリヶ鼻古墳があった(宇野2003・宇野ほか2006)。

(2) 集落・水利開発と牛馬耕の導入

長野A遺跡では、5世紀の竈付設住居跡がみられ、水田祭祀に伴って、牛歯・桃核・須恵器が出土した。吉志集団などの関与で、牛耕がはやくから導入されたと想像される。カキ遺跡では6世紀代の水田に伴う井堰遺構や、7本歯の馬鍬が出土した。金山遺跡 区1号井堰遺構では下駄が、流路D杭列附近から荷鞍部品が出土した。石田遺跡では、7世紀頃の木柄付鉄斧や、7世紀頃の木製壺釜も出土した。また「田」字墨書土器は田部の居住を暗示する。上清水遺跡D区8層上層・祇園町遺跡第3地点M - 5旧河川3B層・

高野遺跡13層でも木製壺鐙が出土した。上清水遺跡の鐙は全面に黒漆を塗り、柄に多角形の面取りを施し、飾金具の痕跡も残る優品。『万葉集』には天平六・七年(734~735)頃豊前国より上蕃し内匠寮大屬となった木安(鞍)作村主益人の歌が見え、渡来系馬具工人の末裔が、奈良時代には中央に出仕したとわかる。

(3) 水晶山麓の須恵器生産

貫・水晶山山麓の天観寺窯跡は、7世紀初め頃から操業している。天観寺窯跡に近い狸山A遺跡では、住居跡より、焼け歪んだ大量の須恵器が出土し、粘土貯蔵穴もあり須恵器製作工房・選別場とみられる。門司区下吉田古墳群では、天観寺窯産須恵器の出土が多く海上輸送が想定され、「吉志」地籍と隣接し、渡来系の吉志集団の墓地と推定される。

水晶山麓の苅田町向野山窯跡は、7世紀中葉の操業で、灰原より円面硯片が採集された。九州最古の例で、屯倉の文字行政に伴い、いちはやく硯が生産されたと考えられる。苅田町雨窪古墳は、天観寺窯跡や狸山遺跡に近く、須恵器生産を統括した首長墓であろう。

(4) 須恵器漁撈具・海産物生産と膳臣

小田富士雄氏は、天観寺窯での蛸壺や漁網用の棒状土錘など漁撈具の生産は、注文に応じた生産を示すとみて、窯業生産の専門化と捉えた(小田富士雄1985)。

平尾和久氏は、豊前地域の須恵器窯で生産された飯蛸壺が、豊前の四屯倉(御崎、大抜・肝等、桑原)と内陸の我鹿屯倉の推定地付近に集中することを指摘する(平尾和久2002)。

豊前周防灘沿岸の棒状土錘は、6世紀後半~7世紀前半にかけて短く太いものから細長いものに変化する。岩崎仁志氏の検討によれば、棒状土錘は古墳時代後半以降に鹿児島~千葉県域まで分布が拡大し、細く、長く、軽く華奢であることから、直線状の浮刺網に使用され、海面近くを泳ぐイワシ・サバ・アジ類を漁獲したと考えられる(岩崎仁志2011)。北九州市門司区の大積前田遺跡では6世紀代の須恵器類、煮沸用甕(製塩土器の可能性もある)、甌、棒状土錘などが出土し、干物の生産を窺わせる。古代の豊前地域には膳臣や膳大伴部がいた。

小倉南区の長野角屋敷遺跡では、8世紀末~9世紀初頭の木簡が出土した。表に「右為勘ノ郡召税長膳臣澄信ノ持事番^姓等依^ケノ不避晝夜視護仕官舎而十日不宿^直」、裏に「只今暁参向於郡家不得延^怠ノ大領物部臣(公?)今継」とある。「大領物部臣(公)今継」は「聞物部大斧手」の末裔、税長膳臣澄信は、大抜屯倉の海産物生産集団の末裔と考えられる。

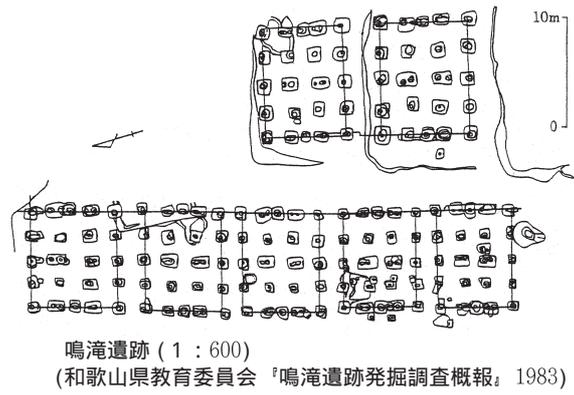
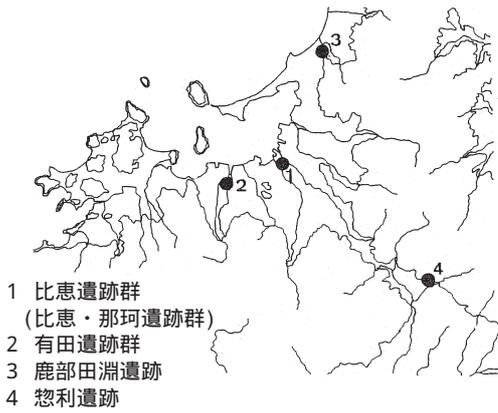
※引用参考文献・註釈の大部分は省略した

甲斐 孝司 2004「鹿部田淵遺跡の官衛的建物群」『福岡大学考古学論集 - 小田富士雄先生退職記念 - 』

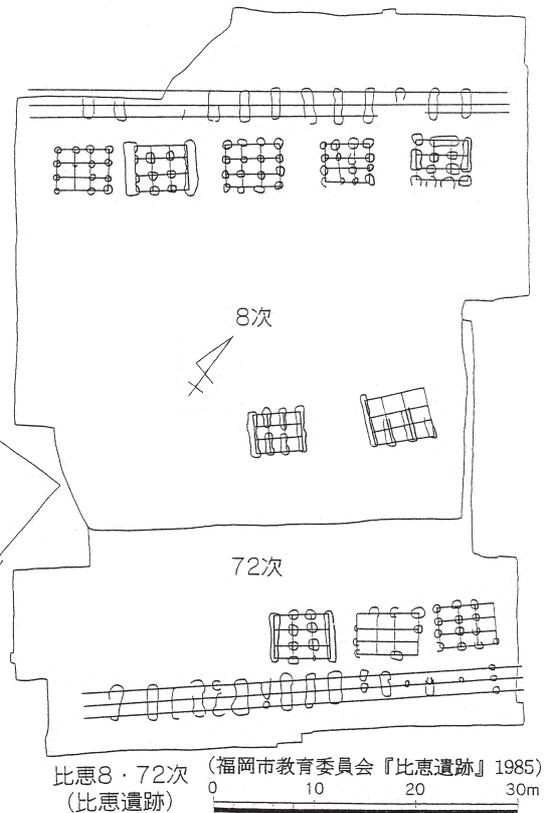
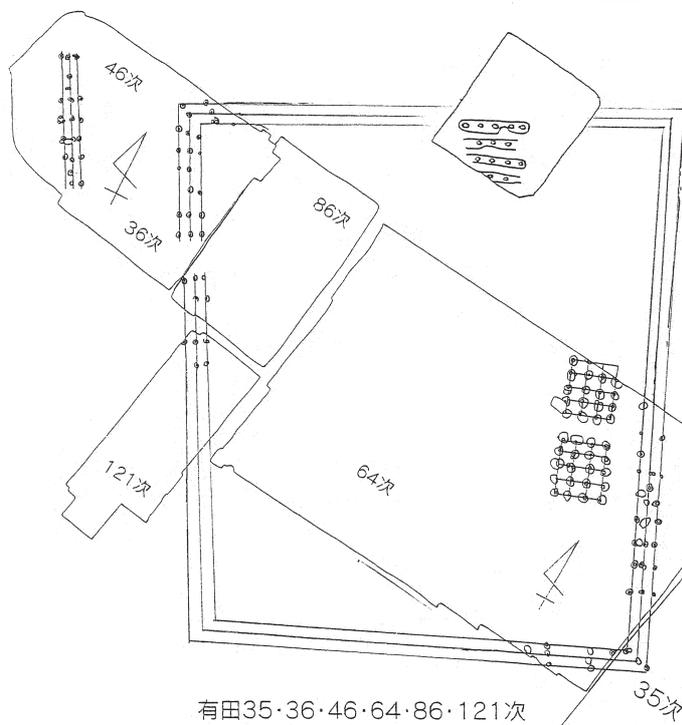
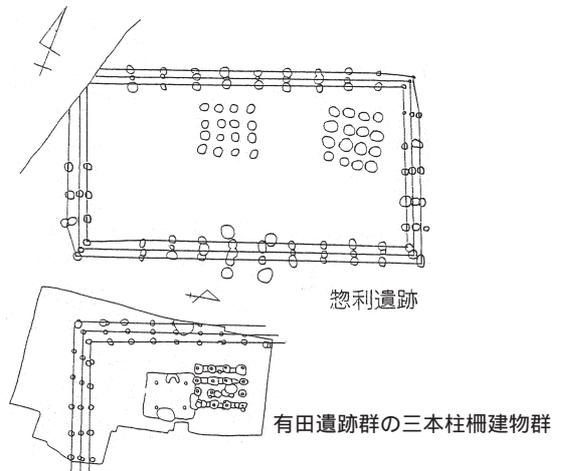
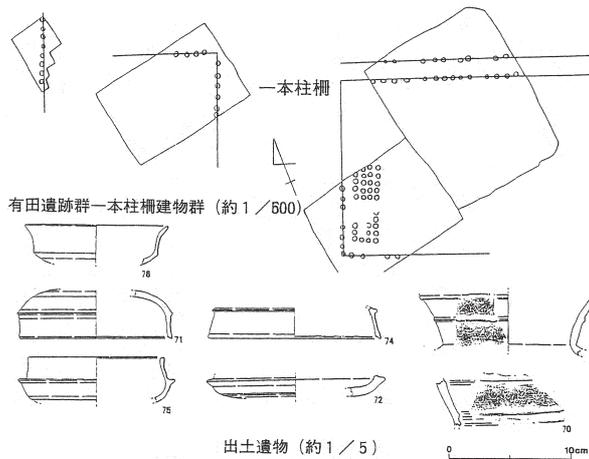
桃崎 祐輔 2010「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦?、還暦! - 武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集 - 』

柳沢 一男 1987「福岡市比恵遺跡の官衛的建物群」『日本歴史』第465号

米倉 秀紀 1993「那津官家 - 博多湾岸における三本柱柵と大型総柱建物群」『福岡市博物館研究紀要』第3号



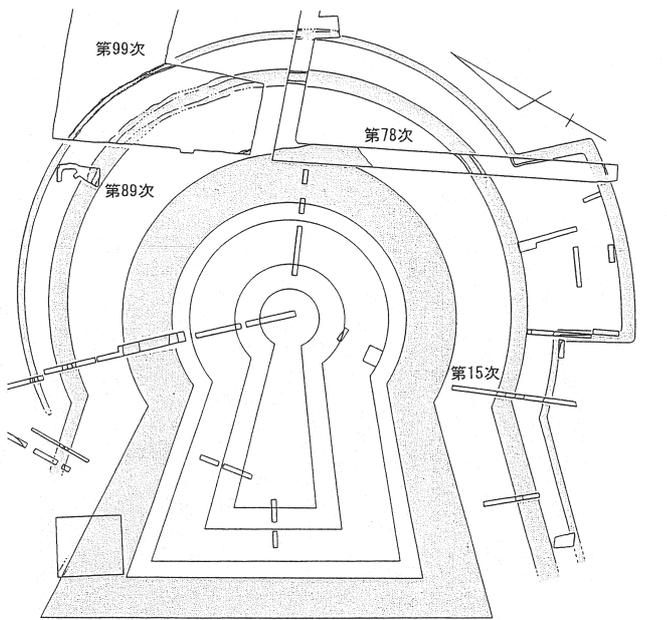
三本柱柵建物群分布図



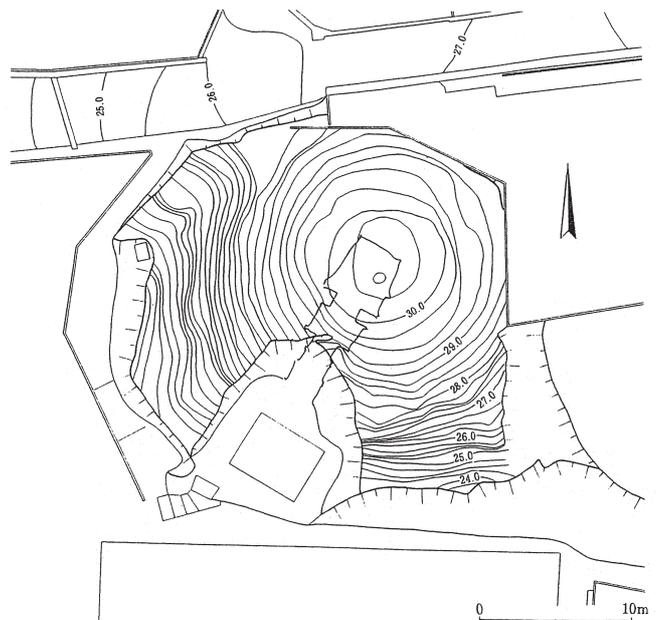
官衛的大型建物群関連遺構 (S = 1 / 600)

図1 那津官家の倉庫群と柵列、有田遺跡の建物群

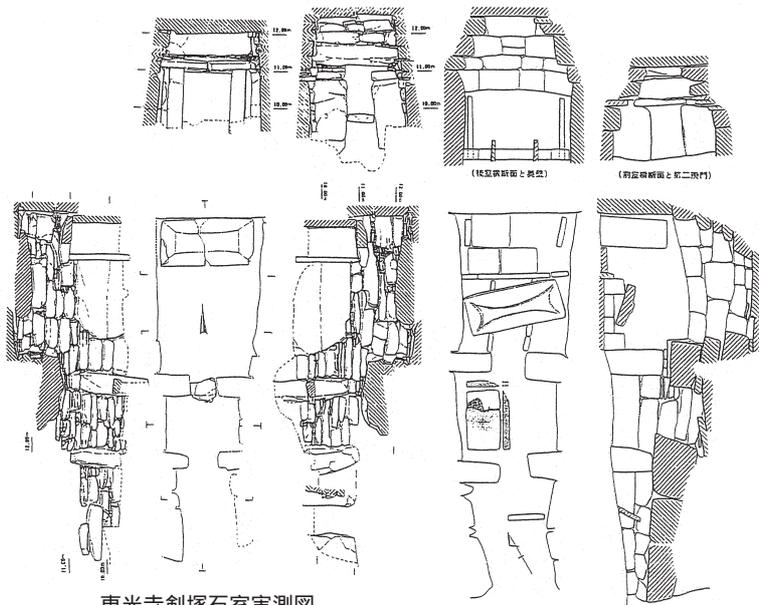
福岡市那珂・比恵遺跡群の古墳時代後期の官衛の遺構群は倉庫群の規模、身舎面積とも巨大で、遺構配置・構成が律令期の地方官衛に類似し、『日本書紀』記載の「那津官家」の候補とされる。



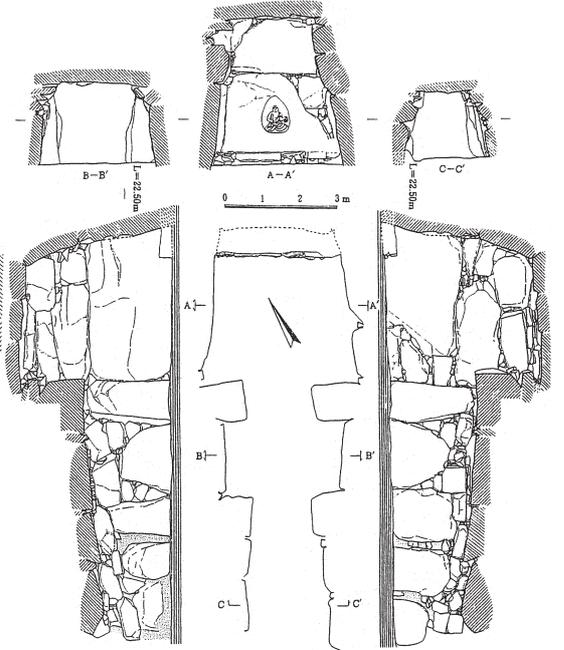
福岡市博多区東光寺剱塚
(福岡市教育員会 2006)



福岡市博多区金隈 今里不動古墳丘測量図

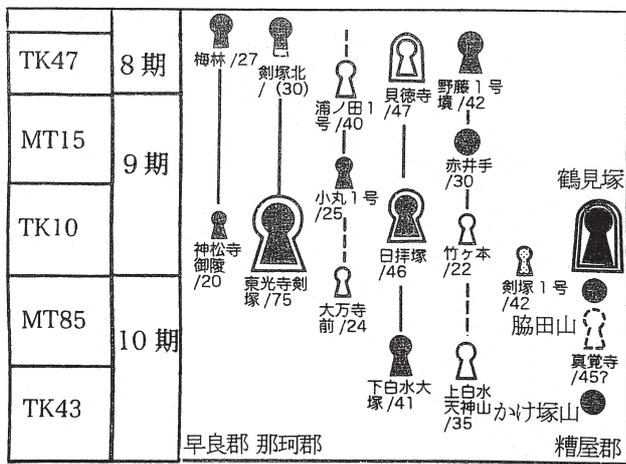


東光寺剱塚石室実測図
(福岡市教育員会 1991)
那津官家管掌者の墳墓



今里不動古墳石室実測図
(福岡市教員委員会・九州大学考古学研究室 1989)

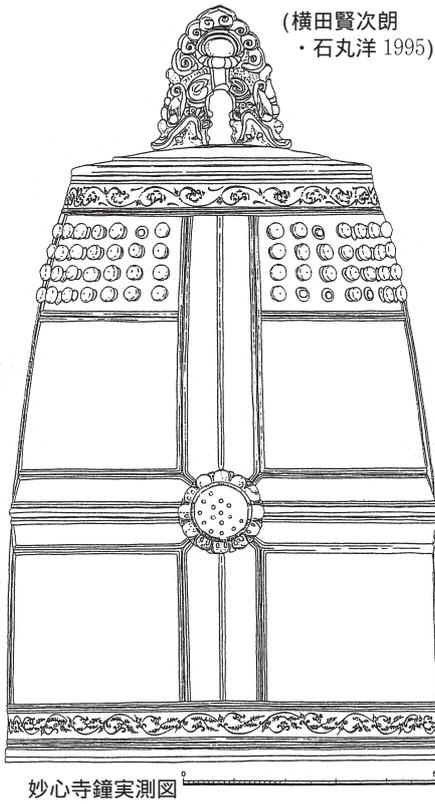
熊本県阿蘇市上御倉古墳
阿蘇君の墳墓 (乙益重隆 1962)



伝福岡市「金隈尾崎山」出土新羅系杏葉
(京都大学蔵) (玉城一枝1987)
今里不動古墳出土品の可能性。
宮地嶽古墳出土品と対比される。

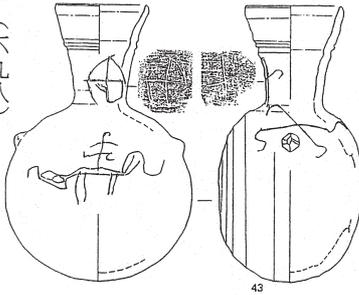
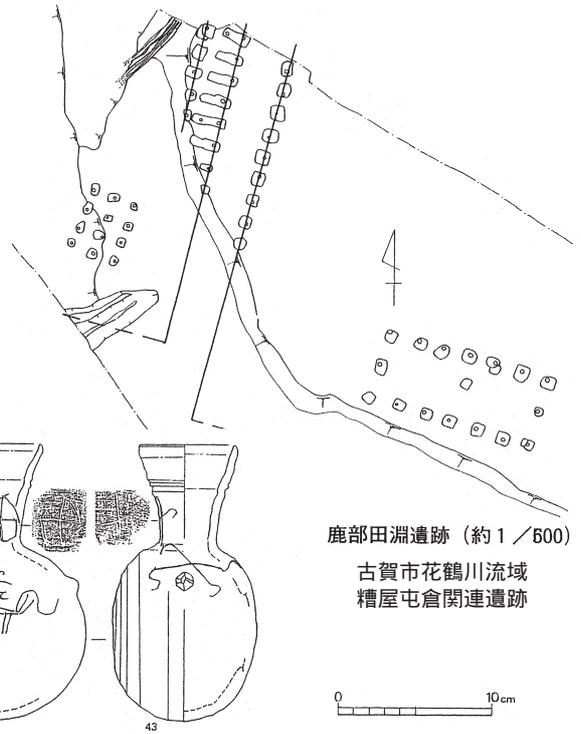
福岡市平野の首長系譜
(重藤輝行2008を改変)

図2 那津官家の首長墳と横穴式石室

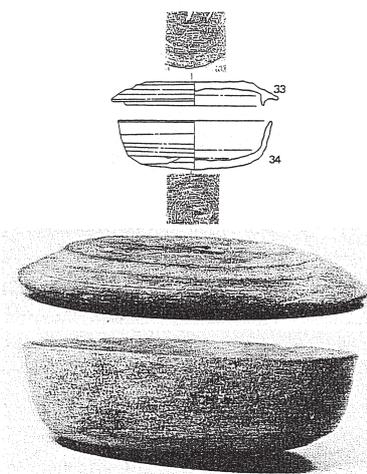


戊戌年四月十三日壬寅 收 糟屋評造春米連廣國鑄鐘

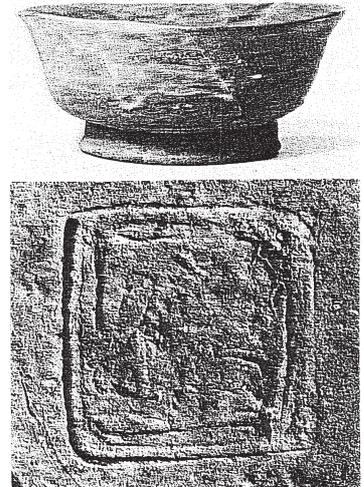
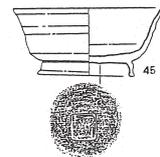
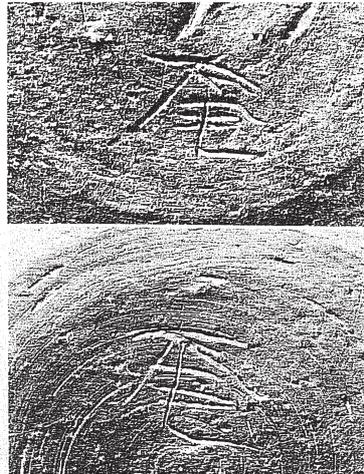
「妙心寺鐘」「戊戌年」文武天皇二年（六九八）
「戊戌年 四月十三日壬寅 收 糟屋評造春米連廣國鑄鐘」



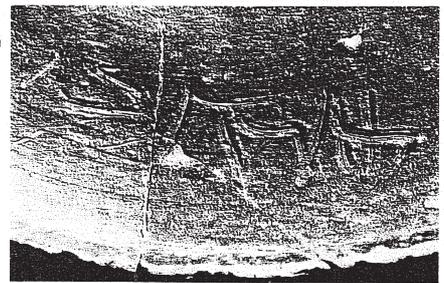
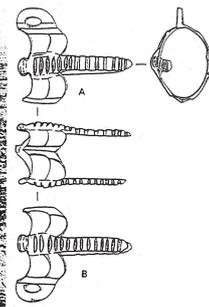
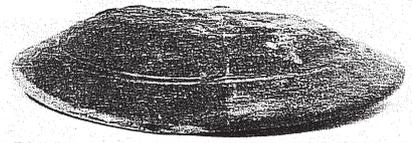
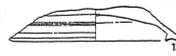
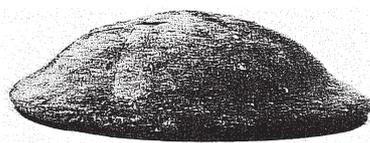
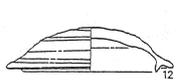
糟屋郡宇美町観音浦岩永浦支群 C 1号墳の
騎馬人物刻書須恵器 (宇美町教育委員会 1981)



宇美観音浦南支部KS16号墳の「大宅？」刻書須恵器

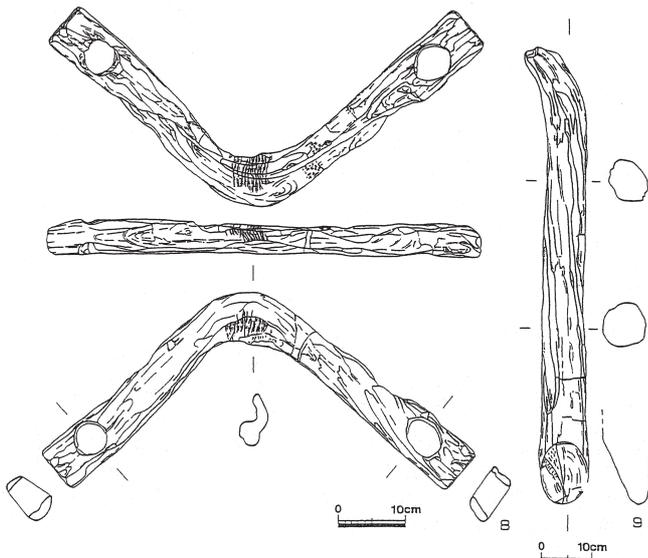


KS16号墳の捺印土器

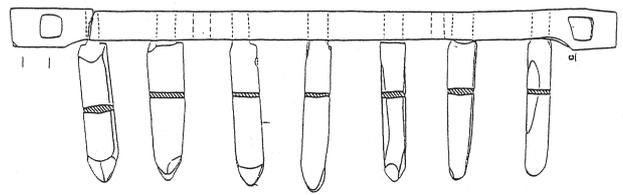


KS19号墳「田マ」刻書須恵器・蜻蛉型刀装具・不明刻書須恵器 (宇美町教育委員会 1981)

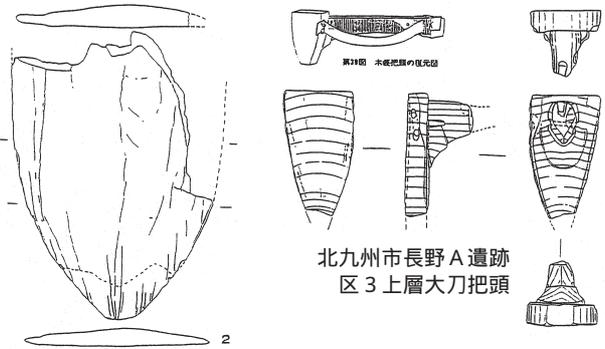
図3 妙心寺鐘にみえる「糟屋評造春米連廣國」と宇美町観音浦古墳群の刻字資料



北九州市金山遺跡流路D杭列付近 荷鞍
小倉南区(大抜屯倉比定地)出土の畜力農耕具

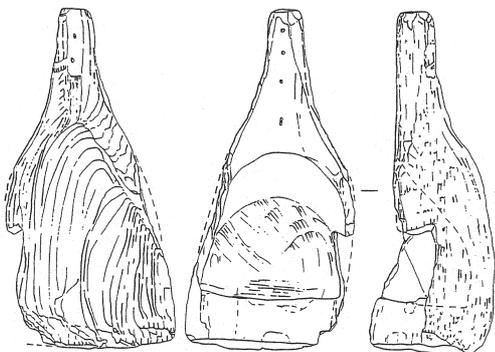


北九州市力キ遺跡出土馬鞵

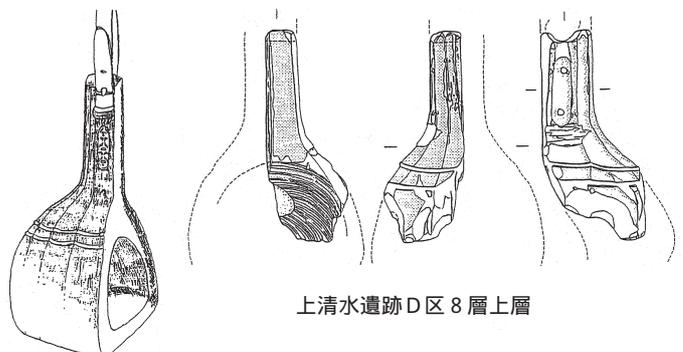


北九州市長野A遺跡
区3上層大刀把頭

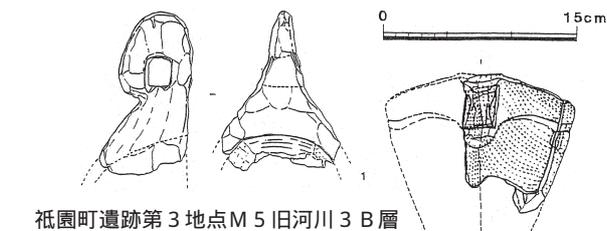
北九州市貫川遺跡
123-1地点唐犁トマ



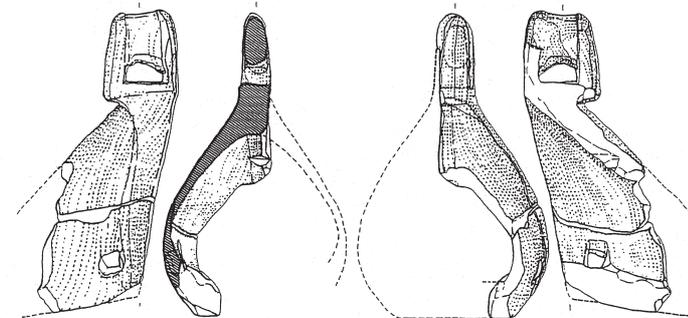
高野遺跡南側谷地



上清水遺跡D区8層上層



祇園町遺跡第3地点M5旧河川3B層



石田遺跡 区CK26G(奈良)

311 梓弓引き豊國 梓弓を引き廻ゆる意か
ら豊國にかけた序、豊國は豊前、豊後
に分れる。今の大分県と福岡県に匹す。○鏡山
福岡県田川郡香春町鏡山という所があるが、
山はないという。鏡山という名は、古墳に青銅
鏡を収めるところから広く各地で古墳に名づけ
る名である。(大意)自分が毎日見ている豊國
の鏡山を久し見ないでいたら恋しくなること
であろう。○鏡と見るとは縁語。

1004 思ほえず來ましし君を佐保川の河蝦聞かせず歸しつるかも
右は、内匠大屬 桧作村主益人、聊かに飲饌を設けて、長官佐爲王を饗せし
に、日斜つに及ばずして、王既く還歸る。時に益人、厭かずして歸ることを
吟借しみて、この歌を作る。
二伝未詳。天平六・七年ころ内匠寮の大属で長
官佐爲王を饗したことが、卷六(三〇)の左注
に見える。

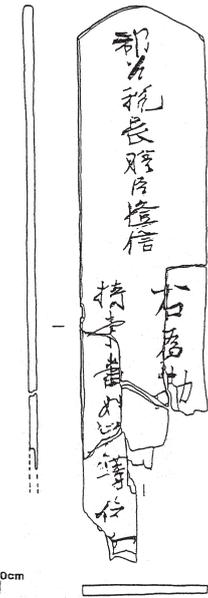
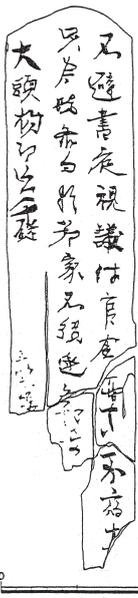
311 梓弓引き豊國 梓弓を引き廻ゆる意か
ら豊國にかけた序、豊國は豊前、豊後
に分れる。今の大分県と福岡県に匹す。○鏡山
福岡県田川郡香春町鏡山という所があるが、
山はないという。鏡山という名は、古墳に青銅
鏡を収めるところから広く各地で古墳に名づけ
る名である。(大意)自分が毎日見ている豊國
の鏡山を久し見ないでいたら恋しくなること
であろう。○鏡と見るとは縁語。

1004 思ほえず來ましし君を佐保川の河蝦聞かせず歸しつるかも
右は、内匠大屬 桧作村主益人、聊かに飲饌を設けて、長官佐爲王を饗せし
に、日斜つに及ばずして、王既く還歸る。時に益人、厭かずして歸ることを
吟借しみて、この歌を作る。
二伝未詳。左注参照。卷三三の作者。
1004 思ほえず來ましし君を佐保川の河蝦聞かせず歸しつるかも
右は、内匠大屬 桧作村主益人、聊かに飲饌を設けて、長官佐爲王を饗せし
に、日斜つに及ばずして、王既く還歸る。時に益人、厭かずして歸ることを
吟借しみて、この歌を作る。
二伝未詳。左注参照。卷三三の作者。
1004 思ほえず來ましし君を佐保川の河蝦聞かせず歸しつるかも
右は、内匠大屬 桧作村主益人、聊かに飲饌を設けて、長官佐爲王を饗せし
に、日斜つに及ばずして、王既く還歸る。時に益人、厭かずして歸ることを
吟借しみて、この歌を作る。
二伝未詳。左注参照。卷三三の作者。

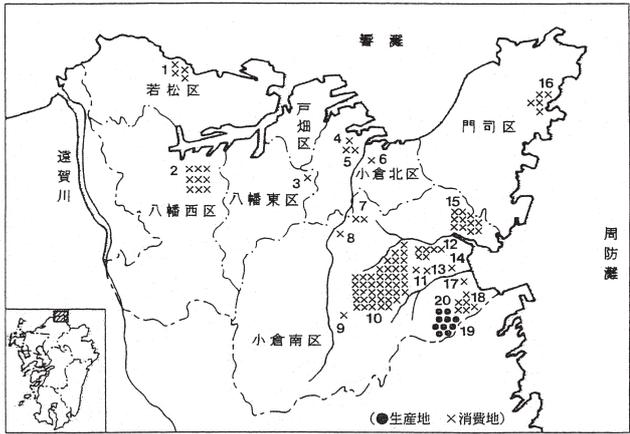
万葉集にみえる豊前の渡来系工匠桧作村主益人

図4 小倉南区(大抜屯倉比定地)出土の木製馬具類と渡来系馬具工人
大抜屯倉周辺渡来人の先進的畜力利用と木製馬具生産。律令期には官営工場の工匠を輩出。

大領物部臣今繼
 只今曉參向於郡家不得延怠
 不避晝夜視護仕官舍而十日不宿直

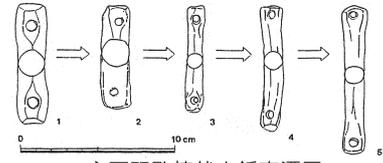


郡召稅長膳臣澄信
 持事番姓
 右為勤
 持事番姓
 口等依



北九州市内の双孔棒状土錘分布図(宇野慎敏 2004)

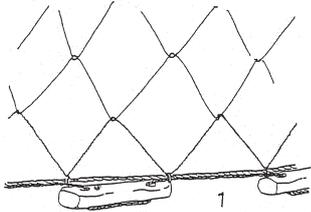
- | | | | |
|---------|---------------|--------------|-------------|
| 1. 浜田遺跡 | 6. 牛丸遺跡 | 11. 長野フンデ遺跡 | 16. 大積前田遺跡 |
| 2. 黒崎遺跡 | 7. 北方遺跡 | 12. 長野A遺跡 | 17. 勝円遺跡 |
| 3. 高槻遺跡 | 8. 南方・上ヶ田遺跡 | 13. 貴・井手ヶ本遺跡 | 18. 朽網南塚遺跡 |
| 4. 愛宕遺跡 | 9. 新道寺天疫神社前遺跡 | 14. 濁崎遺跡 | 19. 天観寺山窯跡群 |
| 5. 野町遺跡 | 10. 上清水遺跡 | 15. 草原遺跡 | 20. 小迫窯跡 |



主要双孔棒状土錘変遷図

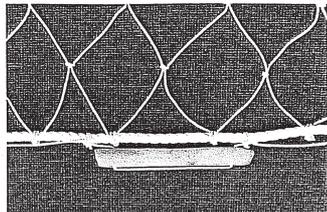
1. 長野フンデ遺跡 6-G区 8層上層
2. 長野A遺跡 区2号住居跡
3. 上清水遺跡 区包含層
4. 朽網南塚遺跡第1地点5区2・3自然流路
5. 天観寺山窯跡群 区2号窯跡

北九州市長野角屋敷遺跡郡召木簡
 文意は、郡家は税長膳臣澄信を召す。右(以下のことを)を勤めるため(欠落している)右側の持事番姓等に依り(意味は不詳)、裏面は右側に昼夜に関わりなく見護つて、官舎(正倉か?)に仕える決まりであるのに、それなのに十日の日に勤務しなかった。以下欠落しているが(そのために不祥事が生じた)、中央部には、只この明け方に郡家に参り出向くように、延ばし遅れることがないように。
 左側上方に大領(郡の長官)物部臣今繼の署名、3字あげ、次官級あるいは主帳等の署名が認められるが不詳。文中の今曉や不得延怠の施行文言から緊急であることが読みとれる。(前田義人 1999)

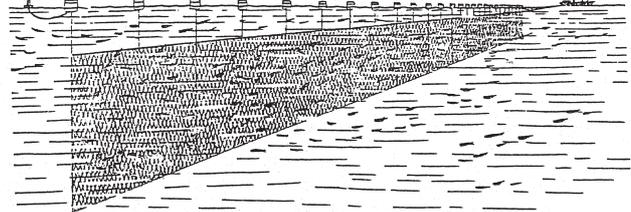


棒状土錘装着法想定図

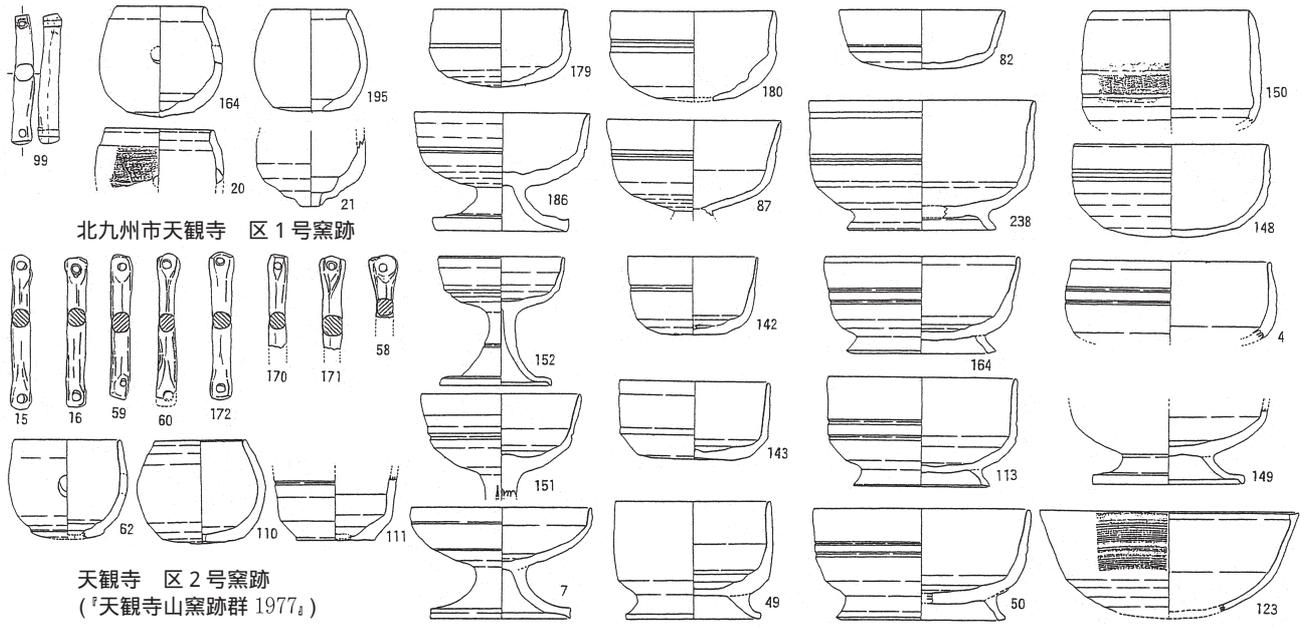
岩崎仁志 2011「古大里遺跡出土の棒状土錘をめぐって」『陶垣』24号



棒状土錘装着法復元



浮刺網(イワシ流網)*宮本1956より



北九州市天観寺 区1号窯跡

天観寺 区2号窯跡
 (『天観寺山窯跡群 1977』)

図5 大板屯倉周辺の須恵器漁撈具生産・海産物貢納体系と膳臣・膳大伴部「膳臣澄信」
 天観寺窯の双孔棒状土錘・蛸壺は貢納用海産物の漁撈具か。また金属器模倣須恵器の充実も屯倉の貢納を暗示。

磐井の乱前後の韓日交渉

慶北大学考古人類学科 朴 天 秀

はじめに

本発表は磐井の乱前後の韓半島と日本列島の交渉について4 - 6世紀における九州の考古資料を中心に検討したい。

従来、磐井の乱について『日本書紀』に依拠し、新羅との関係でその背景を考えてきた。しかし、どの背景で乱が勃発したのか説明的な解釈は十分に行われていない。本発表では特に磐井の乱前後の韓半島と日本列島の交渉について検討し、その発生の背景について接近したい。

1. 5世紀前半の韓半島と日本列島

この時期には4世紀まで入ってきた金官加耶産の文物が日本列島に移入されず、金海地域にも日本列島産の威信財が移入されなくなる。発表者は、5世紀初めの金官加耶の衰退による交渉主体の空白期に、これまで敵対関係にあった新羅の文物が日本列島に活発に移入されたと見る。

5世紀前葉の福岡県月の岡古墳出土の龍文透彫帯金具は慶州市皇南大塚南墳出土品、江陵市草堂洞A - 1号墓、慶山市林堂洞7B号墳などでその類例が確認されることから新羅地域産と判断される。

前面飾金具がU字状である盛矢具は、5世紀初めに日本列島に初めて出現しており、福岡県月の岡古墳、千葉県内裏塚古墳出土品が代表的な例である。これらの古墳で出土した盛矢具は、前面飾金具の形態及びその付属具である懸垂飾金具の形態から釜山市福泉洞21・22号墳出土品と同じ系統と把握されてきた。特にこの三つの古墳の出土品は、懸垂飾金具である中円板状金具の規格と構造、文様が一致し、同じ工人集団によって製作された可能性が高い(田中新史 1988)。また、福岡県堤当正寺古墳と京都府私市丸山古墳出土の盛矢具も文様の形態と製作技法から同じ工房で製作されたと把握される。これまで福岡県月の岡古墳、千葉県内裏塚古墳出土品は釜山市福泉洞21・22号墳の出土例から金官加耶産と把握されてきたが、このような盛矢具が洛東江以東地域の慶山市林堂洞7B号墳、造営洞C - 2号墳など新羅圏内から出土していることと、福泉洞21・22号墳の鉄鋌、土器などの共伴遺物からやはり新羅産と判断される。

さらに注目したいのは、福岡県月の岡古墳、福岡県稲童21号墳など、金銅装眉庇付冑の製作工人の系譜である。これらの冑の製作工人は、月の岡古墳出土の金銅冑の文様が新羅産の帯金具と一致することから、新羅系と判断される。とくに、稲童21号墳の眉庇付冑は金銅製の立飾が付いたもので、最も類似するのは福泉洞10.11号墳出土の金銅冠であり、加耶地域との関わりが指摘されてきた(橋本達也 2005)。ところが、この金銅冠は定型化以前の新羅冠であり、10・11号墳で新羅産の文物が共半することからやはり新羅産と考えられる。5世紀前半代における眉庇付冑の底部の文様が、同じ時期の帯金具の心葉文系と類似するという指摘(橋本達也 1995)も興味深い。その理由は、前述したようにこの時期における心葉文系の帯金具が新羅産であることから、倭の甲冑の製作に新羅系の工人が関わった可能性が強いからである。

一方この時期には4世紀末の慶州市月城路力13号墳出土品のような日本列島産硬玉製勾玉が5世紀から

流入されることに注目する。すなわち、新羅の王陵級古墳である皇南大塚・天馬塚・金冠塚・瑞鳳塚出土の金冠を装飾されている硬玉製勾玉は、すべて日本列島産である。それで新羅産金工品をもつ稲童21号墳における9点という硬玉製勾玉は、その被葬者が新羅との交易に関わっていた可能性を伺える。

この時期には4世紀まで金海地域から供給された鉄素材である鉄鋌が5世紀前半には新羅産にかわり、新潟県糸魚川産の硬玉製勾玉が新羅王陵級古墳の金冠に装着される。新羅産の金銅製帯金具と日本列島産硬玉が、王権と地方との関係を象徴する着装型威信財として両地域でそれぞれ活用されることから、この時期の新羅と倭は敵対関係としてのみ見ることはとうていできない。

新羅王権と倭王権との交渉は金官加耶衰退後、日本列島との交易掌握とともに、従来の敵対関係を打開しようという新羅の意図によるものと見る。これとともに、金官加耶の衰退以後、鉄とともに、特に新羅の金工品のような威信財を確保するための新たな交渉相手が絶対的に必要であった倭の利害関係が一致したのである。

5世紀前半、倭がもっとも欲しがっていた鉄と金を両方もっていた一番近い国は新羅にほかならない。この時期における新羅と河内王朝の飛躍的な発展は両者の交流がもたらした産物といっても過言ではないであろう。『日本書紀』応神31年(420年)条、仁徳11年(443年)条などの新羅人技術者の派遣記事などは、新羅と倭の政治的な交渉を示唆する。とくに『日本書紀』允恭紀には、加耶や百済との交渉の記事がまったく見られず、新羅との交渉記事のみ見られ、注目に値する。すなわち、允恭3年条の新羅への使節派遣、新羅からの医者派遣と帰国記事、允恭42年条の新羅からの甲問団の派遣記事は、その当時の新羅と倭の友好的な関係を物語る。したがって新羅と倭は敵対的な関係ではなく、戦争と外交の両面的な関係として認識できる。

発表者は、4世紀末、突如鞍塚古墳出土のような新羅産馬具が河内に移入され、また慶州市月城路力13号墳出土品のような日本列島産硬玉製勾玉が移入されることに注目する。その理由はこの時期に硬玉製勾玉が大阪南部の古墳に集中することから、新羅と河内勢力の交渉が4世紀末に始まった可能性が高いためである。これで金官加耶と佐紀勢力が交渉するなかで新たに新羅と河内勢力との交渉が成立したと推定される。結局、このような交渉相手の盛衰が両勢力の興亡に影響を与えたと考えられる。

さらに、5世紀前半における新羅と倭の交渉は、その当時、新羅を圧迫していた高句麗に対する牽制が背景にあったとも考えられる。なぜなら、5世紀中葉、すなわち高句麗が撤退する時期から新羅産文物が日本列島に入らなくなり、突如大伽耶産がその代わりに移入されるからである。

2. 5世紀後半の韓半島と日本列島

5世紀中葉の大伽耶は高霊を拠点に成長し、黄江水系、南江中上流域、蟾津江水系、南海岸、錦江上流域にわたる広域圏を形成し、加耶史上、画期的な発展を見せた。大伽耶が南江上流域に進出した直後、大伽耶の文物が日本列島で出現しており注目される。すなわち、この時期の政治的地位を象徴する威信財である金銅冠と、日本列島全域で出土する金製垂飾付耳飾が大伽耶産であるという事実は、5世紀後半、大伽耶が倭との交渉において中心的な役割を果たしたことを示す。また、5世紀後半に新羅産の龍文透彫帯金具にかわって出現した半肉彫龍文帯金具は、大伽耶産であり、この時期の新羅産馬具にかわって大伽耶産の金銅装f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を組み合わせた馬具が日本列島全域に移入される。この時期にお

ける長野県と宮崎県出土の馬はほとんど大伽耶産の馬具を装着しており、大伽耶から馬飼の技術が導入されたと考えられる。一方、これまで日本列島産文物が移入されなかった内陸の大伽耶圏で、倭系文物が集中移入される。

大伽耶は南江上流域に進出した後、南原盆地に南下し、求礼を経て蟾津江河口の交易港である河東を確保するとともに、南海岸の中央に位置し、長く突出し半島の軍事的な要衝である麗水地域を占有したと考えられる。麗水は南海岸の中央に位置する長く突出した半島状の地形を形成し、その前面に島が横方向に開かれ、波風を阻んでくれる防波堤としての役割を果たしており、栄山江河口と洛東江河口との間の水深が一番深い天恵の良港である。朝鮮時代には水軍節度使が設置されて、左水営と三道水軍統制営が布陣したことからわかるように、軍事的な要衝であった。

最近、5世紀後半からこれらの地域における大伽耶の文物が集中することから、いわゆる任那四県の位置すなわち百済との国境に近い大伽耶の領域が、従来主張されてきた栄山江流域ではなく、蟾津江河口域一帯の南海岸であることが明らかになった。

4世紀まで移入された金官加耶産文物と、5世紀前半まで移入された新羅産文物にかわり、それらと比較して優勢ではなかった大伽耶産文物が5世紀後半になって日本列島に突如流入する背景は、大伽耶が南海の制海権を掌握することで、特に百済と倭の交通だけではなく、倭の中国交通にも一定の影響力を行使することができるようになったためであろう。これは大伽耶である加羅が『宋書』倭国伝(451年)に突如登場する時期と一致する。

『日本書紀』継体6年(512年)に百済による任那四県の占領と継体23年(529年)に百済の聖明王が倭系百済官僚をとおして加羅の多沙津すなわち大伽耶の港である河東地域を根強く求めていたことは、大伽耶の発展が南海岸の制海権の掌握を背景していたことを物語る。

この時期新たに各地に台頭した有力首長墓である西日本の熊本県江田船山古墳、近畿地域の和歌山県大谷古墳、東日本の埼玉県稲荷山古墳に大伽耶産の金銅製装身具と馬具、鉄製武器・武具のような威信財が副葬されたことは、雄略期の日本列島内の政治的変動(都出比呂志,1988)と密接に関連するものと考えられる。

『日本書紀』雄略8年(464年)に任那王が膳臣斑鳩などを送り高句麗を攻撃する記事があるが、ここでいう任那王は大伽耶王であり、これは庚子年条の倭の出兵が金官加耶と関連するように、大伽耶と連繫するものと推定される。また、『日本書紀』顕宗3年(487年)紀生磐宿祢の記事も同じ脈絡のなかで理解できる。大伽耶は高句麗、新羅、百済の軍事的進出に対抗するため、倭王権だけでなく各地の豪族勢力を活用し、反対給付として文物を提供していたと推定される。

3. 6世紀前半の韓半島と日本列島

6世紀初め、日本列島に導入された文物の舶載地が大伽耶から百済に転換し、加耶地域に移入された倭系文物が百済支配下の栄山江流域に集中する。この時期に百済の文物が移入されたのは、当時日本列島で鉄生産が開始されることによって加耶地域の鉄素材に対する依存度が低くなり、かわりに国家整備に必要な不可欠な高等宗教である仏教・儒学のような先進文化・文物を倭が百済から導入しなけりばならなかったためである。

この時期に出現する栄山江流域の前方後円墳の被葬者は、この地域の前方後円墳が周辺の在地首長系列と全く関係なく突如出現し、1世代に限って築造されることと、墳形、埴輪祭式、石室、副葬品のような倭人固有の墓制からみて、在地首長とみることはできない。その被葬者は、石室類型などからみて、周防灘沿岸、佐賀平野東部、遠賀川流域、室見川流域、菊池川下流域などに出自をもつ倭人と見られる。これは『日本書紀』雄略23年(479年)に三斤王が死去したのち、東城王の帰国を筑紫国の軍士500人が護衛したという記録と一致する。また、その被葬者は百済熊津期の後半に限定的に築造された点、意図的に分散して配置された点、百済の威信財が副葬された点から倭系百済官人と判断される。

栄山江流域に倭人が派遣されたことは、漢城陥落によって一時的に統治機構が瓦解した百済が熊津に遷都したのち、自力で南方を統治できる力量と、特に高句麗戦と任那四県などをめぐる大伽耶戦に必要な軍事力が不足していたためである。倭系古墳における武器・武具の副葬が卓越する点からもいえる。

たとえば、海南半島の倭系古墳被葬者は西海と南海を連結する海上交通の要衝の確保と大伽耶の南海岸の要衝である任那四県の麗水半島と帯沙の河東地域を掌握しようとする百済の戦略下に配置されたと推定される。栄山江上流域の光州地域と潭陽地域の前方後円墳被葬者も大伽耶を圧迫する百済の戦略によって配置されたと考えられる。『日本書紀』継体6年(512年)の任那四県の記事に見られる唎国守の穂積臣押山の存在は倭人が百済の地方官として対大伽耶攻略、対倭交渉に活動していたことを物語る。

蘆嶺山脈を越えた最北端の七岩里古墳と月桂古墳は5世紀代における全羅北道南部の在地勢力の最大の中心地である雅山地域を西方から制圧し、また両古墳の被葬者は法聖浦を寄港地として対高句麗戦に動員された可能性が想定される。これと関連して『日本書紀』雄略23年(479年)にみる筑紫の安致臣と馬飼臣の高句麗攻撃の記録が注意される。

6世紀初めから百済地域の文物が急激に流入する背景として、百済がこれまで独自の克服できなかった相対的な交通の不利を、交通の要衝である己汶、帯沙、任那四県の占有と栄山江流域の前方後円墳被葬者を媒介に克服した結果と解釈したい。

百済による倭王権と九州北部の豪族勢力に対する両面的な外交戦略は、韓半島と日本列島における百済の影響力を強化し、一方北部九州勢力も日本列島における影響力を強化する、相互に理にかなったものであった。その仲介役としての栄山江流域の前方後円墳の被葬者は、百済王権に臣属しながら倭王権と百済王権間との外交で活躍した欽明紀に見える倭系百済官僚の原型とも言える。すなわち、江田船山古墳の百済系装身具や銘文大刀とその後の欽明紀に見える倭系百済官僚のあり方は、栄山江流域における前方後円墳の被葬者である九州の有力豪族が、倭王権とともに百済王権に両属していたことを示唆する。百済王権が九州地域の豪族を選択した背景は、彼らが5世紀後半から瀬戸内海沿岸と山陰・北陸などに広い関係網を持っていたことが挙げられる。また、畿内の豪族ではなく彼らが選ばれたのは、やはり倭王権の意向より百済王権の意図によるものと考えられる。

6世紀前葉における突如とした九州勢力の興起を象徴するのは、北部九州系石室の拡散と華麗な装飾古墳の存在である。その背景は栄山江流域における前方後円墳の被葬者を仲介とした北部九州勢力が、百済の先進文物の受け入れの役割を担ったことに起因するのであろう。

この時期に新たに台頭する継体勢力は、百済と倭の本格的な交流が6世紀初めに開始され、北陸、近江地域に百済系文物が集中することから、従来河内勢力と伝統的に密接な交流関係にあった加耶勢力を排除

し、百済を窓口に進文物を導入し、河内勢力との差別化を図り、畿内において優位性を確保したと把握される。このような継体の擁立には5世紀後半から瀬戸内海沿岸と山陰・北陸などに広い関係網を持っていた九州勢力が百済王権との仲介などの役割をしたと推定される。一方、栄山江流域の前方後円墳被葬者を含めた北部九州の有力豪族の対外活動が頂点に達し、倭王権をおびやかすようになり、その結果が527年の磐井の乱と考えられる。栄山江流域の前方後円墳は磐井の乱後、538年の百済の泗泚遷都によるこの地域の直接支配と、6世紀前半の百済の大伽耶攻略が一段落するなかで消滅する。

一方、この時期に慶南西部地域には固城郡松鶴洞1号墳B号石室、宜寧郡景山里1号墳、宜寧郡雲谷里1号墳、泗川郡船津里古墳、巨濟市長木古墳などのような倭系古墳が突如出現する。また晋州市中安洞古墳群の六獣鏡、宜寧郡泉谷里21号墳の須恵器、固城郡内山里古墳群の須恵器、山清郡生草9号墳の須恵器と珠文鏡などのような倭系文物も集中する。

加耶地域の倭系古墳の被葬者は、景山里1号墳、雲谷里1号墳が大伽耶圏域に造営されたことと、景山里1号墳、雲谷里1号墳、松鶴洞1号墳B号石室で大伽耶様式土器が副葬されたこと、長木古墳で大伽耶産鉄銚、松鶴洞1号墳A、B号石室では大伽耶産剣菱形杏葉とf字形鏡板付轡が副葬されたことなどから大伽耶と関連する倭人と見るべきである。このような倭系古墳と須恵器が出土した古墳は高霊地域から南江水系を経て南海岸に行く交通路上に集中する傾向がみえる。泗川市船津里古墳は晋州から一番近接した港口である泗川湾の右岸に立地し、松鶴洞1号墳は南海岸の海上交通の要衝である固城半島の中心に位置する。景山里1号墳が位置する宜寧北部地域は大伽耶が洛東江に沿って南下する交通路の要衝であり、雲谷里1号墳は南江下流域の交通路上に立地する。

6世紀前葉、百済の攻略のなかで蟾津江河口の交易港である河東地域を通じた交通が難しくなった大伽耶は、蟾津江路の代わりに南江路を選択し、小伽耶圏域の各地域首長との連繫を通じて晋州を経て南下して固城湾と泗川湾のような港口を確保したと想定される。固城郡松鶴洞1号墳B号石室、宜寧郡景山里1号墳、雲谷里1号墳では百済、新羅の文物も副葬される。このような文物は栄山江流域の前方後円墳で見られる大伽耶系文物と同じく被葬者の生前の活動を現わすもので、大伽耶王権下で倭、百済、新羅交渉に活躍した倭人の存在を想定できる。

その倭人は、百済が移植した栄山江流域における前方後円墳の被葬者のように、大伽耶と連繫した小伽耶によって百済、日本列島、新羅外交及び軍事活動のために移植されたと見ることができる。景山里1号墳の直下の多数の中小型石槨墓から大刀、鉄銚、鉄鏃のような武器の副葬が卓越し、雲谷里1号墳でも大刀が複数副葬され、長木古墳では日本列島産の頸甲のような甲冑とともに、大刀、鉄銚、鉄鏃といった武器の副葬が顕著である。

加耶地域における倭系古墳の被葬者はこのように武器と武具の副葬が卓越した点から、百済側で活動した栄山江流域の前方後円墳の被葬者の活動を牽制するための軍事的な役割を遂行したものと推定される。このことと関連して注目したいのは加耶地域における倭人の出自が栄山江流域と異なることである。すなわち、宜寧郡景山里1号墳、雲谷里1号墳、巨濟市長木古墳は北部九州系であるが、一方固城郡松鶴洞1号墳は木柵などから紀伊系、泗川市船津里古墳は石室の石材と羨道の段差がある構造から吉備系と考えられるためである。両地域には大谷古墳など大伽耶産文物の副葬が顕著なことからも傍証できる。したがって、大伽耶は栄山江流域の前方後円墳被葬者の活動を牽制するために、彼らと出自が異なる複数の地域が

ら倭人を動員したと考えうる。

加耶地域の倭系古墳と栄山江流域の前方後円墳は、任那四県と帯沙、己汶地域を中央に置いて分散配置されており、6世紀前葉に限定された出現時期と、それぞれ大伽耶と百済産の威信財を保有したことから、両者は任那四県と帯沙、己汶をめぐる攻防戦に、出自が異なる複数の倭人が大伽耶と百済側にそれぞれ動員されたことを示唆する。

その後、栄山江流域の前方後円墳は、百済によるその地の直接支配と百済の対大伽耶攻略が一段落する状況の中で消滅するようになる。また、倭系百済官僚の出自が畿内周辺に集中することになるが、これは磐井の乱以後、九州勢力の衰退を示すものであろう。

4. 6世紀後半の韓半島と日本列島

この時期における福岡県沖ノ島遺跡の7号祭祀遺構の金銅製馬具はその形式のみではなく、帯先金具と鉸具には玉虫と雲母の装飾があることから新羅産と考えられる(神谷正弘2003、諫早直人 2012)。金製指輪も新羅産である。さらに注目されるのは8号祭祀遺構出土のカットグラス碗である。この碗は東北アジアで最もガラスの出土例が多い新羅を経由したと判断される。

この時期を代表する馬具である奈良県藤ノ木古墳出土鞍は、鞍の中央にある洲浜とその左右の磯金具を一緒につくる一体鞍である点、歩揺付立柱式雲珠および心葉形鏡板付轡と鐘形杏葉などの馬具と、鉤金具が板状である点から最も新羅的な特徴を備えていると見られる(千賀久2003)。また、藤ノ木古墳鞍の後輪に付く三脚把が、慶州市皇南大塚北墳の透彫金銅板皮玉虫鞍の付属具である金銅製異形透彫装飾にみられ、金製の鎖飾を嵌入した青琉璃玉も慶州市皇吾洞52号墳の金装刀子の柄頭に付着された金象嵌青色琉璃玉と類似する(神谷正弘2002)。なおかつ、三脚把を持つ鞍が慶州市皇吾洞37号墳、慶山市林堂洞5A号墳、星州郡星山洞38号墳など5世紀後半の新羅地域の古墳で集中的に副葬され、これを新羅鞍の特徴の一つとみる見解が提示された(李炫姫2007)。

この時期の国家祭祀場である福岡県沖ノ島遺跡と大首長墓である群馬県綿貫観音山古墳、埼玉県將軍山古墳などで新羅産馬具と銅鏡などの威信財が出現する。とくに韓・日間の航路上の祭祀遺跡である沖ノ島で新羅産馬具が奉獻されたことは、この時期の新羅と倭の国家間交渉を示唆する。藤ノ木古墳出土品のような華麗な馬具は、その威信財的な性格からみて新羅王権と倭王権間の交渉なしには導入が不可能であったらう。

562年の加耶滅亡を前後して、再び新羅と倭の国家間交渉が活発になり、『日本書紀』欽明21年(560年)に新羅と倭がはじめて国交を結ぶ。ところで、この時期は百済と倭の関係がその後20年間断絶する。6世紀後半の両者間の交渉は、新羅は南部加耶諸国を支配下に置き、加耶北部地域の併合をもくろむうえで百済と倭の交渉を断絶させる必要があり、一方、倭は新羅が加耶諸国の併合によって南海岸東部の制海権を掌握するようになることで百済との交通が難しくなったことに起因する(金恩淑1994)。

この時期は中国の南朝が滅亡し、政治、文化の中心が華北に移ることによって、これまで南朝に頼ってきた百済が衰退し、一方漢江下流域を確保し、西海の制海権を掌握した新羅が北朝との関係を結んだことによって倭が新羅に頼ることになったと考えうる。

6世紀後半の長崎県壱岐島双六古墳出土の白油縁彩円文碗は北齊産であるが、慶州市雁鴨池から出土例

があり(弓場紀知2006)、またこの古墳から新羅の土器と馬具が伴っているので、新羅を経由したと判断される。このことは釜山市福泉洞65号墳で同じく北齊産の青磁碗が出土したことから伺える。同じく群馬県観音山古墳出土の北齊産の銅製水瓶も、新羅の馬具が伴っていることから新羅を経由したと推定される。

おわりに

これまで磐井の乱については文献記録に依拠し、新羅との関係で説明されてきた。ところが、本発表では前後の韓半島と日本列島の交渉について検討し、栄山江流域の前方後円墳被葬者を含めた北部九州の有力豪族の対外活動が頂点に達し、倭王権をおびやかすようになったことがその発生の背景と考えた。

これから百濟王権、大伽耶王権、新羅王権、九州勢力、倭王権の錯綜した関係の解明とおして磐井の乱の背景 その歴史的な意義について考えたい。

(参考文献)

- 千賀 久, 2003, 「日本出土新羅系馬装具の系譜」, 『東アジアと日本の考古学 - 交流と交易 -』, 東京, 同成社.
- 橋本達也, 1995, 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義」, 『考古学雑誌』第80巻第4号, 東京, 日本考古学会.
- 橋本達也, 2005, 「稲童21号墳出土の眉庇付冑」, 『稲童古墳群 - 福岡県行橋市稲童所在の稲童古墳群調査報告』, 行橋, 行橋市教育委員会.
- 李炫姪, 2007, 「新羅古墳出土 鞍橋 손잡이試論」, 『嶺南考古學』41, 釜山, 嶺南考古學會.
- 諫早直人, 2012, 「九州出土馬具と朝鮮半島」, 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』, (第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表要旨資料集), 北九州, 九州前方後円墳研究会.
- 金恩淑, 1994, 「6世紀後半新羅와倭国의国交成立過程」, 『新羅文化財學術發表會論文集』第15輯, 慶州, 新羅文化宣揚會.
- 神谷正弘, 2002, 「藤ノ木古墳出土金銅装鞍について」, 『考古学ジャーナル』NO482, 東京, ニューサイエンス社.
- 神谷正弘, 2003, 「玉虫装飾品集成」, 『古文化談叢』第50集(中), 北九州, 九州古文化研究会.
- 大賀克彦, 2005, 「稲童古墳群の玉類について - 古墳時代中期後半における玉の伝世 -」, 『稲童古墳群 - 福岡県行橋市稲童所在の稲童古墳群調査報告』, 行橋, 行橋市教育委員会.
- 朴天秀, 2007, 『加耶と倭』, 東京, 講談社選書.
- 朴天秀, 2007, 『古代韓日交渉史』, ソウル, 社会評論.
- 朴天秀, 2009, 『日本列島 속의 大伽耶文化』, 大邱, 高靈郡・慶北大学校.
- 朴天秀, 2010, 『加耶土器 - 加耶의 歴史와 文化 -』, ソウル, 真仁真.
- 朴天秀, 2011, 「栄山江流域 前方後円墳에 대한研究史의檢討와 새로운照明」, 『韓半島의前方後円墳』, ソウル, 学研文化社.
- 朴天秀, 2011, 『日本のなかの古代韓国文化』, ソウル, 真仁真.
- 早乙女雅博・早川泰弘, 1997, 「日韓硬玉製勾玉の自然科学分析」, 『朝鮮学報』第162輯, 天理, 朝鮮學會.
- 高田貫太, 2003, 「5・6世紀洛東江以東地域 과日本列島의交에 관한豫察」, 『韓国考古学報』50, 大邱, 韓国考古学会.
- 田中新史, 1988, 「古墳出土の胡 籙 鞞金具」, 『井上コレクション 弥生・古墳時代時代資料図録』, 東京, 言叢社.

都出比呂志, 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」, 『待兼山論叢』, 史学篇22, 大阪大学文学部.

吉田 晶, 1998, 『倭王権の時代』, 新日本新書.

弓場紀知, 2006, 「壹岐双六古墳出土の白釉縁彩圓文碗 - その年代と中國陶瓷史上の位置づけ - 」, 『双六古墳』, (壹岐市文化財調査報告書 第7集), 長崎縣壹岐市教育委員会.

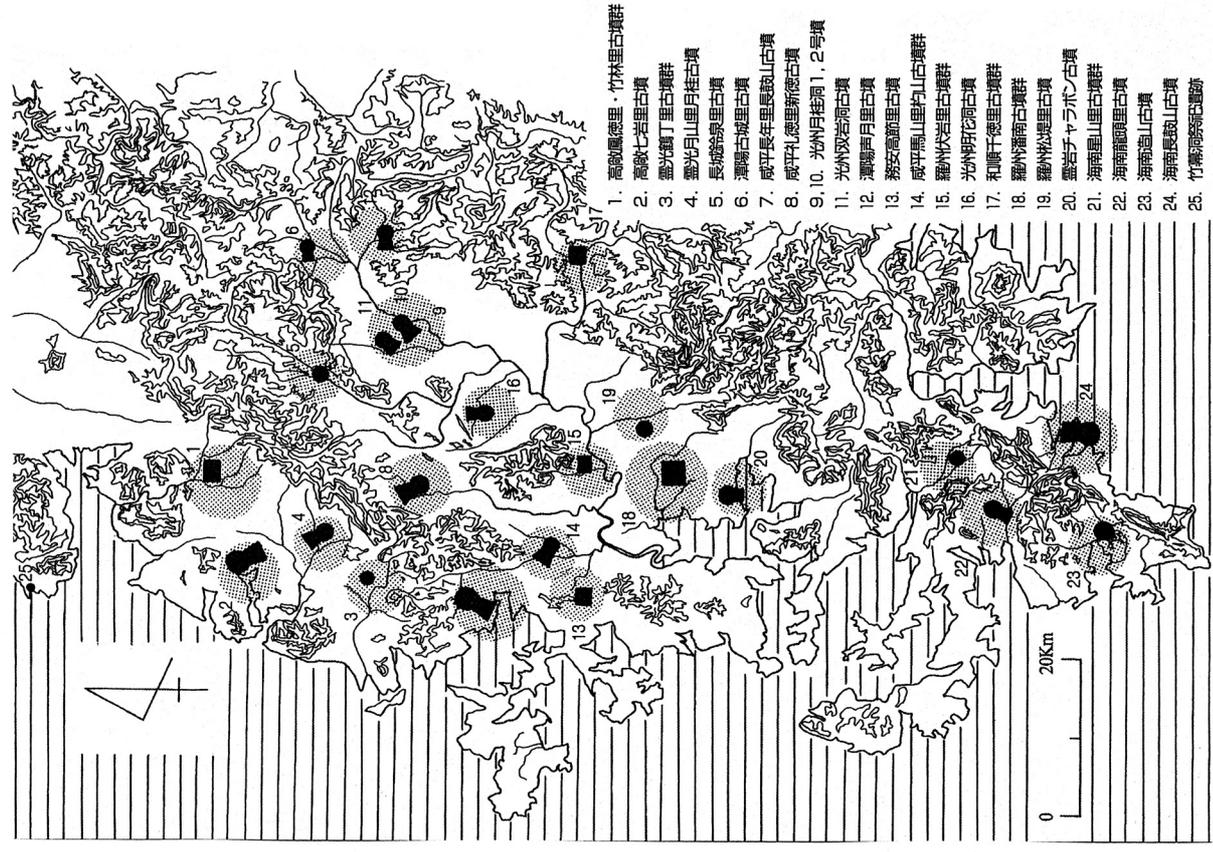


図2 栄山流域の前方後円墳（『加耶と倭』2007より引用 一部改変）

本参考資料は松浦（嘉麻市教委）が作成した。

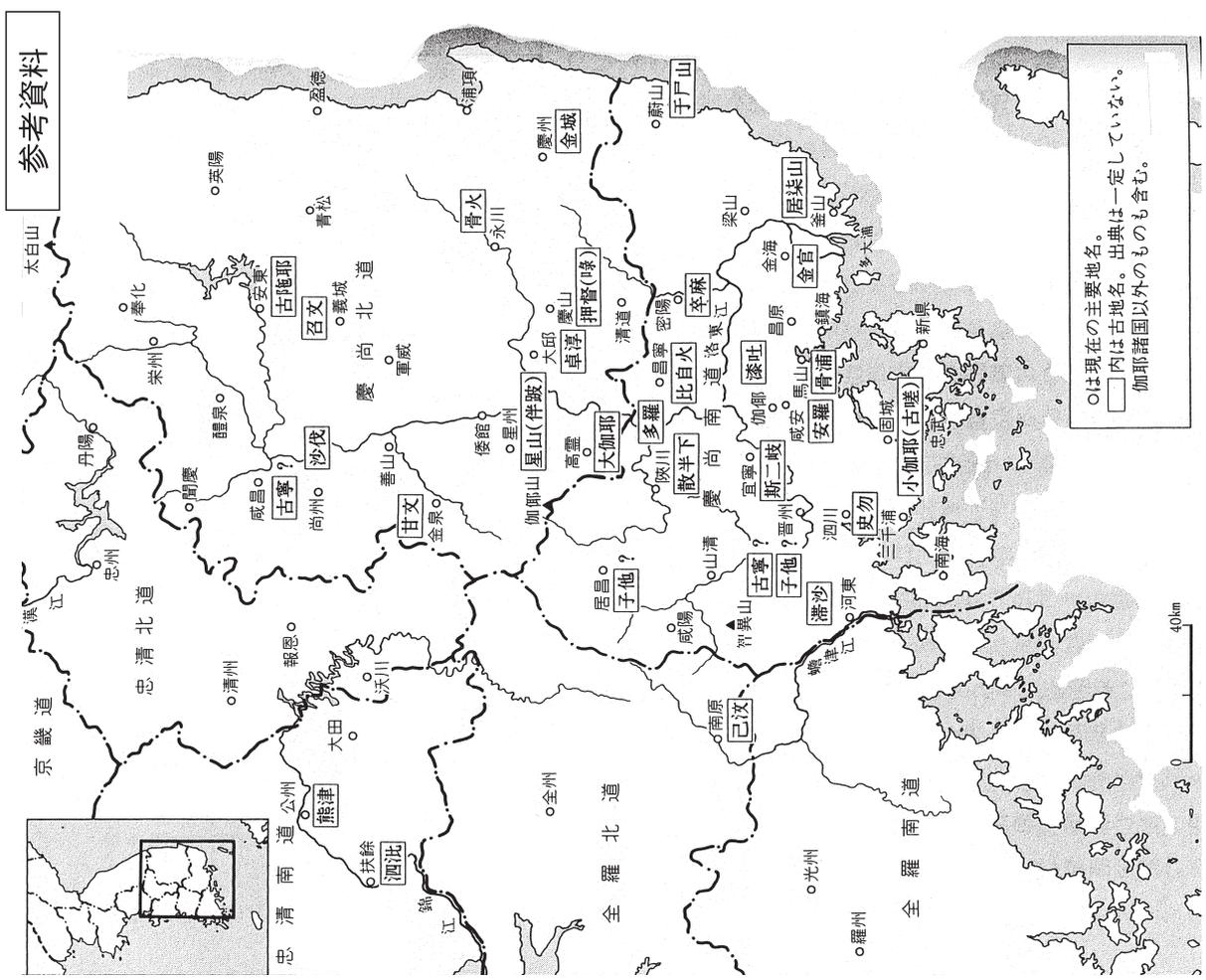


図1 加耶諸国位置図（『韓国の古代遺跡』1989より引用 一部改変）

参考資料

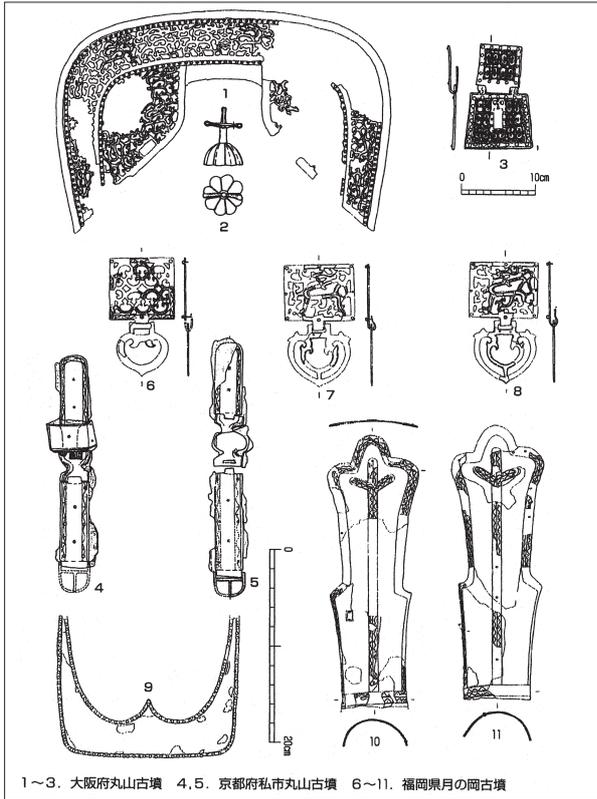


図3 5世紀前半日本列島の新羅文物 (『加耶と倭』2007より引用 一部改変)

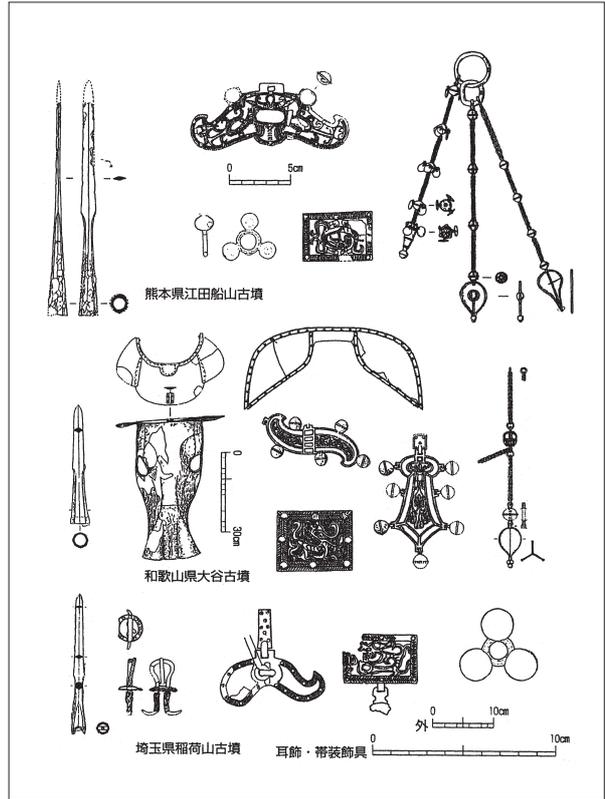


図4 5世紀後半日本列島の大伽耶文物 (『加耶と倭』2007より引用 一部改変)

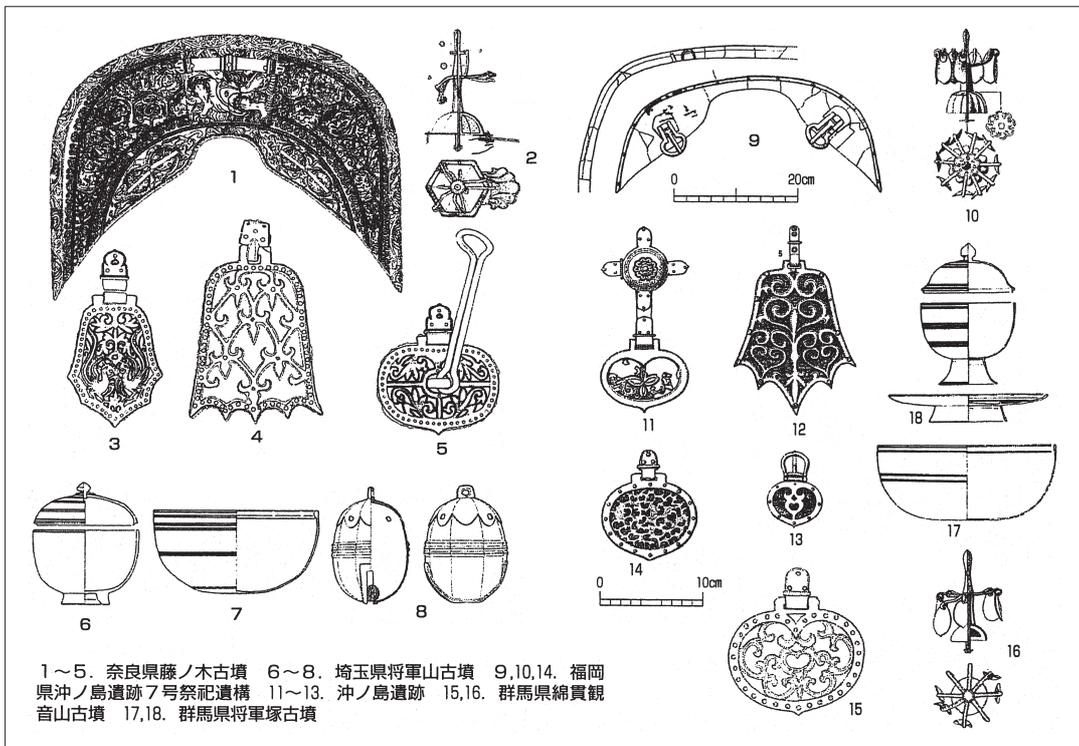


図5 6世紀後半日本列島の新羅文物 (『加耶と倭』2007より引用 一部改変)

本参考資料は松浦 (嘉麻市教委) が作成した。

「筑豊」のミヤケと渡来文化

嘉麻市教育委員会 松 浦 宇 哲

はじめに

福岡県の中央部を南北に貫流し響灘に注ぐ遠賀川は、県内では筑後川に次ぐ大きな河川であり、古代から鉄道が発達する近代にいたるまで、物資の輸送手段として大きな役割を果たしてきたことが、文献記録などから垣間みることが出来る。

現在、遠賀川水系の内陸部を指す筑豊という地名は、「筑前」と「豊前」の旧国の頭文字を合わせたもので、明治時代以降この地域で石炭産業が発展する中、一つの経済圏として新しく誕生した名称である。現在の筑豊地域に含まれる飯塚市・嘉麻市・桂川町の2市1町が位置する嘉穂地域(旧筑前国)と田川市・糸田町・大任町・川崎町・香春町・添田町・福智町・赤村の1市6町1村が位置する田川地域(旧豊前国)とは、地形上、山塊によって隔てられてはいるものの、後述のように両地域の遺跡から出土する考古資料などからは人々の活発な交流が推察され、古墳時代においても政治・社会的につながりが深い地域であったと思われる。

そこで、本稿においても、遠賀川上流域に位置する嘉穂・田川の両地域を示すときはカギ括弧付きで近代以降なじみの深い筑豊の名称を用いたい。

1 「筑豊」の首長墓とミヤケ

一般に、一地域の中で前方後円墳や大型円墳などに埋葬される人々は、豊富な副葬品の内容などから、その地域において政治・軍事などの指導的立場にいた人物と推察されている。考古学ではこうした人物が埋葬された古墳を「首長墓」と呼ぶことが多い。また、首長墓が一定の区域内において一定の期間連続して築かれるような場合、各埋葬者は何かしらの血縁・地縁関係をもつ人々と推察されることから、これらの古墳群を「首長墓系譜」と呼ぶこともある。

「筑豊」の首長墓は、古墳時代前期から位登古墳(田川市)、忠隈古墳(飯塚市)、沖出古墳(嘉麻市)などの前方後円墳や大型円墳が各小地域に断続的に築造されてきた。しかし明確な首長墓系譜は古墳時代中期にいたるまでほとんど形成されることはなかった⁽¹⁾。ところが、古墳時代後期にあたる6世紀代になると、嘉穂地域では前方後円墳の築造数がいっきに増加し、明確な首長墓系譜がいくつかの小地域で形成されるようになる。この時期の前方後円墳、大型円墳の築造が集中する地域をみると、大きく3つの小地域に分けることができる。すなわち、宮ノ脇古墳(飯塚市)、寺山古墳(飯塚市)、山王山古墳(飯塚市)が築かれた北部地域、王塚古墳(桂川町)、天神山古墳(桂川町)、ホーケントウ古墳(飯塚市)が築かれた南西部地域、竹生島古墳(嘉麻市)、次郎太郎1号墳、2号墳(嘉麻市)が築かれた南東部地域である。これに対して、田川地域では大型古墳による明確な首長墓系譜はみられず、古墳時代を通じて断続的に前方後円墳や大型円墳の築造がみられる状況である。狐塚1号墳(大任町)、夏吉21号墳(田川市)、伊方古墳(福智町)などが田川地域を代表する6世紀代以降の首長墓とみなせよう。

ところで、『日本書紀』の記述によれば「筑豊」にミヤケが置かれたのは、安閑2年(535)のこととさ

れる。「穂波屯倉」と「鎌屯倉」は現在の嘉穂地域に、「我鹿屯倉」と「桑原屯倉」は現在の田川地域に比定されている⁽²⁾が、嘉穂地域のミヤケが共に律令制の「穂波郡」、「嘉麻郡」に引継がれる名称であるのに対して、田川地域の場合は、中世以降の「赤庄」(現赤村)、「桑原村」(現大任町北部)にそれぞれ遺称としてみる事ができるのみといった違いもみられる。こうした違いは、ミヤケの機能や規模、運営形態などが決して一様ではなかったことをうかがわせるが、大型の前方後円墳が築かれた嘉穂地域とそうでない田川地域とでこのような差がみられることは単なる偶然に過ぎないのであろうか。例えば、旧嘉麻郡内には、墳長約66mの前方後円墳である寺山古墳など、旧穂波郡内には墳長約65mの前方後円墳である天神山古墳などが築かれるのに対し、「桑原屯倉」周辺では墳長約30mの前方後円墳である狐塚1号墳(現大任町)が首長墓として挙げられるのみである。また、「我鹿屯倉」が置かれた現在の赤村周辺には有力な首長墓は現在まで確認されてはいない。嘉穂地域と田川地域の事例は、ミヤケの運営にあたって大和王権が在地首長の権力がある程度利用しながら進めていく場合とより直営的な方法をとる場合とがあったことを示しているようにもみえる。

いずれにせよ、在地首長のもつ権力がミヤケの運営にどのように取り入れられていくのか、また在地首長はどのような見返りを大和王権に求めたのか興味もたれるところである。

2 「筑豊」の渡来文化

ここでは、「筑豊」にミヤケが置かれる以前の5世紀後葉から渡来文化の様相をたどってみることにして、どのような渡来文化がミヤケと関連性をもつのかについて考えてみたい。

① ミヤケ設置以前の状況

5世紀後葉は、嘉穂地域では北部地域に墳長約80mの前方後円墳の山ノ神古墳(飯塚市)、田川地域では直径約37mのセストノ古墳(田川市)が首長墓として築かれた時期にあたる。両者共に甲冑などの武具、大刀や鉾などの武器類を多数副葬する首長墓で、渡来系文物の副葬もみることができる。山ノ神古墳では複数の鑄造鉄斧(写真1)、セストノ古墳では小壺(写真2)や馬具の飾り金具(齊藤2011)が渡来系文物として副葬されており、それらは朝鮮半島南東部を流れる洛東江の流域から東側地域にかけての文物(以下、新羅系文物と呼ぶ。)であることが大きな特徴である。また、この時期を前後する中小の古墳にも新羅系文物の副葬がみられ、小正西古墳(飯塚市)の馬具(鐙)(写真3)、かつて塚古墳(嘉麻市)の鉄鐙(写真4)、長畑古墳(香春町)の金製耳飾(写真5)などが挙げられる。中でも金銅製の帯金具(写真6)を副葬していた櫛山古墳(飯塚市)は、渡来人の可能性が指摘されている古墳である⁽³⁾(嶋田1991)。一方、集落遺跡をみても、木下遺跡(飯塚市)において5世紀中頃までさかのぼるカマドをもつ竪穴住居が数棟確認されているなど、渡来人の居住が推察される遺跡も散見される。しかし玄界灘沿岸域や筑後川上流の朝倉地域などのように、5世紀代における集落や生産技術に関わる渡来文化の影響は明確ではなく、渡来人が集団で「筑豊」に移住してきたような状況は認めにくい。古墳の副葬品を中心にみられる一連の渡来系文物が「筑豊」と朝鮮半島との交流を示すものだとすれば、交流の実態は、首長間を中心とした政治・軍事的レベルでの一時的な交渉にとどまるものであったといえる。また、この時期の大和王権の外交政策が百済を基軸としたものであることを踏まえれば、新羅系文物の副葬からうかがえる「筑豊」と朝鮮

半島との交渉は、王権の政策からは自立した動きとみてよいであろう。

6世紀前葉になると嘉穂地域では、山ノ神古墳に次いで墳長約86mの王塚古墳が首長墓として築かれる。王塚古墳は横穴式石室内に彩色壁画が施されているが、そこに描かれた星宿図は高句麗の古墳にみられる壁画の影響を受けた可能性があることが指摘されている(柳沢2004)。また近年、朝鮮半島南西部を流れる栄山江の流域を中心に前方後円墳が分布することが分かってきたが、これらの古墳の埋葬施設に採用されている石室の構造が、「筑豊」をふくむ中北部九州地域の石室と類似することなどから両者間の交流が推定されるようになった。柳沢一男氏は王塚古墳の石室とよく似た構造の石室をもつ古墳が朝鮮半島にもみられることを重視すれば、栄山江流域や百済との交渉を介してさらに高句麗との接触があった可能性も視野に入れる必要があるとしている(柳沢2004)。このような指摘と符合するように、この時期の渡来系文物の古墳への副葬は、王塚古墳とその周辺に顕著にみられる。先学(高田1998 李2010)を参考にすれば、王塚古墳の鉄鉾が百済もしくは大伽耶系、平塚古墳(桂川町)のサルボ(写真7)が百済系の文物として確認できる。宮ノ脇古墳(飯塚市)の馬具についても造作の特徴から百済地域との関連性が指摘できる(松浦2005a)。なお、5世紀後葉の築造が推定される小正西古墳の副葬品中にも百済系の鉄鉾がみられるが、これを追葬資料とみなすことができれば、当該期の資料として評価したいところである⁽⁴⁾。

以上のように、ミヤケが置かれる以前の5世紀後葉から6世紀前葉にかけての渡来文化の様相を概観したところ、「筑豊」では盟主となる首長墓を中心に渡来系文物の副葬を追うことができ、在地首長層を中心に朝鮮半島南部との交流が断続的に行なわれてきたことが推定された。しかしその一方で5世紀代と6世紀代の副葬品の内容には明らかな変化も認められる。すなわち、5世紀代では、新羅系文物の副葬が多くを占めるのに対し、6世紀代になると特に嘉穂地域では新羅系文物がみられなくなり、王塚古墳を中心に百済地域との関連性が強く認められるようになることである(松浦2005a)。このことは、前述のように5世紀代の外交活動が、大和王権の政策とは直接、関連しない九州独自の動きであったのに対し、6世紀代の栄山江流域を含む百済地域との交渉は、王権の外交戦略に組み込まれたものであった可能性が高いことを示している。つまり「筑豊」で盟主的首長となった王塚古墳の被葬者は、王権外交の中で重要な役割を担いつつ王権との結びつきを強めていった人物であったと考えることができよう⁽⁵⁾。王塚古墳の副葬品中に北部九州では唯一、大和王権(継体王権)との親密性を示す馬具が含まれている(松浦2005b)ことなどもこのことを裏付けている。

なお、田川地域においては6世紀代の首長墓にみられる渡来系文物の様相ははっきりとしない。しかし、7世紀初頭前後の首長墓である夏吉21号墳(田川市)からは、伝世品と考えられる新羅系の環頭大刀(写真8)が出土している(小方1987)ように、新羅神を祀る香春岳周辺の遺跡を中心に5世紀代から断続的に新羅系文物の出土がみられることは、嘉穂地域とは異なる地域性を示しており注意が必要である。こうした地域差もおそらく嘉穂地域で王塚古墳が出現するあたりから、6世紀代を通して次第に強くなっていくものと思われる。

② ミヤケ設置以後の状況

ミヤケが置かれた後の6世中葉以降、「筑豊」では前述のような首長墓を中心にみられた渡来文化の影響は次第に希薄となっていくようである。その一方で6世紀後半から7世紀にかけて渡来系生産技術の各

地への移植と拡散が明確にみとめられようになる。

まず、嘉穂地域の北部で須恵器の生産が先行して開始される。井出ヶ浦窯跡（飯塚市）は、6世紀後半代を中心に操業された須恵器窯であるが、その開始期は、近年の調査で6世紀中葉にまでさかのぼる可能性が出てきた。この年代観は、窯跡の隣接地に立地する前方後円墳の寺山古墳の築造時期に近いもので、窯と首長墓とが隣接して造成されている事実は、須恵器窯の開業にあたって、在地首長の強い意向が働いたことを推測させる。また、6世紀末以降には、地域性のある三足壺や土馬の生産が行なわれたり、最近の調査では窯跡の灰原から大量の須恵器に混じって朝鮮半島系の瓶形土器（写真9）が出土したりするなど、須恵器窯の操業に専門的な知識や技能を有する渡来人の動員があったことをうかがわせる。窯跡の周辺に分布する中小の円墳群は、渡来人を含む須恵器生産に携わる集団とその管掌者達の墳墓群である可能性が高い。

一方、嘉穂地域の南部では馬見山の山麓地帯（嘉麻市）が注目される。この山麓周辺は律令期においては嘉麻郡馬見郷に位置する。「馬見」という地名からも察せられるように馬にまつわる伝承が数多く残っており、馬の放牧が古に行なわれていたという伝承も残っている地区である。また、当地に鎮座する馬見神社の縁起などには、「馬見物部」を伝える記録をみることもできる。この馬見地区に位置する原田遺跡（嘉麻市）の調査では、6世紀後半の小円墳にともなう殉葬馬の土坑が数基、発見されている。さらに近隣の遺跡からは、8世紀代の大型の掘立柱建物や焼塩壺、土馬の出土などがみられ、律令期に公的な施設が存在したことが推定されている。馬の殉殺行為については、すでに朝鮮半島との関連性が指摘されており（森1978）、前述の伝承などとも合わせて考慮すれば、6世紀後半代には嘉穂地域南部で「牧」の運営が行なわれていたとみて間違いはないだろう。周辺に分布する中小の円墳群には、簡素な鉄製馬具を副葬する古墳が多く、渡来人を含んだ馬飼集団の墳墓群である可能性が考えられる。馬の生産が当地域で開始された歴史的背景には、朝鮮半島での軍事的緊張が高まる中、大和王権が朝鮮半島の百済へ軍事的援助の一つとして馬を与えた記述が参考となる。ミヤケの機能に軍事的機能を求めることができるとすれば、当地域の馬匹生産は大和王権による百済支援策の一助を担っていた可能性も考えられよう。

嘉穂地域に比較すると、田川地域の生産遺跡に関する調査はあまり進んでおらず、実態はまだよく分かっていない。その中で香春岳の南西部に位置する五徳畑ヶ田遺跡（香春町）は、6世紀初頭前後の土坑から新羅系文物である鉄鐸が出土している点で注目される。現時点で、鉄生産を示す遺構は確認されてないものの、当遺跡では6世紀後半代の住居址が多数検出されており、周辺に豊富な磁鉄鉱が埋蔵されていることなどを考慮すれば、近隣で製鉄が行なわれていた可能性は想定しておく必要がある（桃崎2010）。また、律令期に入ると、田川地域南東部の「我鹿屯倉」の推定地周辺では、合田遺跡（赤村）において8世紀以降の製鉄に関わると推定される大規模な炭窯と焼塩壺が出土しており、周辺に何等かの公的施設の存在が推測されている（井上1985）。田川地域での鉄生産の可能性が高まる中、直接的な遺構の発見が望まれるところである。

なお、田川地域の須恵器窯についても、天郷窯跡（福智町）と8世紀代の資料が採取されている号四郎窯跡（川崎町）が知られている（長谷川1991）が、詳細な内容は分かっていない。

3 「筑豊」の横穴墓とミヤケ

「筑豊」ではミヤケが置かれた後の6世紀後半から7世紀初頭を中心とした時期に、高塚の古墳に加えて崖面に横穴を掘りこんだ横穴墓が多数造営されるようになる。横穴墓に副葬される渡来系文物は、首長墓の副葬品に準じたものからそれらとは質的に異なるものまで多様であることが大きな特徴となっている。

まず、群集して数世代にわたり造営される横穴墓の中には、しばしば、首長墓に副葬されるような金属製品を出土するものがある。嘉穂地域では池田1号横穴墓(飯塚市)の4振りの装飾付大刀、西ノ浦上14号横穴墓(飯塚市)の金銅装馬具(写真10)、二塚横穴墓(桂川町)の青銅製釧(写真11)など、田川地域では神崎1号墳⁽⁶⁾(福智町)の装飾付大刀(写真12)、伊田狐塚B-4号、D-4号横穴墓(田川市)の鉄鉾などが挙げられる。このうち、二塚横穴墓の青銅製釧と伊田狐塚D-4号横穴墓の鉄鉾は造作の特徴から朝鮮半島製の可能性が高い。首長墓に準じた副葬品をもつ横穴墓の多くは、他の横穴墓に比べて埋葬空間の規模も大きく、墓群造営の初期に位置付けられるものが多いことが特徴である。こうした横穴墓を造営できる人々の中には、ミヤケを通じて新たに地位や財産を築いた人も含まれていたであろう。

一方、中小の高塚古墳や横穴墓には、渡来人との関連が指摘されている特殊な形状の土器や漢字一文字をヘラ書きした須恵器(嶋田1999 亀田2004)が副葬されることがある。地域性がみられる土器として、嘉穂地域では伊川古墳(飯塚市)出土の三足壺(写真13)、田川地域では長谷池横穴墓群(田川市)、狐ヶ迫横穴墓群(田川市)出土の角形把手が付いた椀などがある。また、ヘラ書須恵器では、池田横穴墓群(飯塚市)、小池横穴墓群(飯塚市)出土の「日」の文字を記した杯や瓶(写真14)、漆生地区の古墳(嘉麻市)出土の「史」の文字を記した壺、伊田狐塚横穴墓群(田川市)出土の「夫」の文字を記した小壺(写真15)、狐塚横穴墓群(大任町)の「市」?の文字を記した杯などがある。嶋田光一氏は、北部九州にみられる7世紀前半代のヘラ書須恵器の分布が、ミヤケや新羅系古瓦を出土する古代寺院の分布域に重なることを指摘する。さらに、須恵器に記された「日」の文字が後世の文献にのこる嘉麻郡「草壁郷」の地名や嘉麻南郷司「權掾日下部」の人名から「日下部」を示す可能性があることなども指摘している(嶋田1999)。

なお、渡来系文物ではないが、九州島に特徴的な南海産の貝輪の副葬もミヤケとの関連を考える上で重要である。6世紀後半以降、北部九州では南海産の貝輪の分布が遠賀川水系に多くみられるようになる要因としてミヤケの影響があることを木下尚子氏が指摘している(木下1996)。また、田村悟氏は、貝輪を副葬する横穴墓が墓群中でも限られているとし、特定の職掌を示す可能性があることを指摘する(田村1997)。こうした指摘を踏まえれば、これまで在地首長をはじめとする上位層が主導してきた貝輪の流通に変わり、屯倉の設置を通して、専門的に携わる中間層の集団が形成された可能性を積極的に考慮する必要がある(松浦2007)。6世紀後半以降、岩崎地下式横穴墓(嘉麻市)のように九州南部の墓制が「筑豊」に散見されるようになることも、貝輪の流通を通じた九州南部との交流を裏付けるものとして評価されるものである。

4 「筑豊」の古代寺院

律令期の「筑豊」においては、古代寺院の建立が渡来人との関係を知る上で重要である。寺院の建立にあたっては、仏教に対する知識はもとより、先進的な建築技術が必要とされるため、先進的な知識・技能を有する多くの渡来人が動員されたと考えられている。豊前地方を中心にみられる新羅系の意匠をもつ古

瓦を使用する古代寺院については、新羅系仏教と渡来系氏族である秦氏との関係が推察されていて、秦氏の下に渡来系集団が服属していたことが指摘されている(小田1977)。「筑豊」では大宰府政庁から豊前地方へ抜ける官道沿線に、7世紀後半代頃の創建と推定される大分廃寺(飯塚市)と天台寺跡(田川市)が遺跡として残る。また、官道から大きく外れた嘉穂地域南東部の山間部には9世紀代の瓦が出土した宮の脇廃寺(嘉麻市)もみられる。大分廃寺からは、新羅系の意匠をもつ軒瓦、天台寺跡からは、古新羅系、統一新羅系(写真16)、高句麗系の意匠をもつ(亀田1995)軒瓦がそれぞれ出土しており、天台寺跡の近隣には寺院の瓦を生産した瓦窯跡も確認されている。田川地域(豊前)の天台寺の建立については、その北側に位置する香春岳の銅生産と関連付けて、秦氏の関与が考察されている(小田1977)。また、北部九州における新羅系瓦をもつ古代寺院の分布とミヤケ設置の分布域が重なることから、秦氏の移入が6世紀前半代までさかのぼる可能性も指摘されている(小田1977)。6世紀代の田川地域における生産遺跡の実態が不明確な点は前述のとおりであるが、香春岳の西方に位置する夏吉古墳群(田川市)は、田川地域では珍しい高塚の古墳群で、前述のように新羅系文物を副葬する首長墓も含まれるなど、秦氏との関連が考慮される墳墓群として重要である。

なお、大分廃寺が位置する旧穂波郡では、「秦」、「穂浪吉志(吉士)」の渡来系氏族、宮の脇廃寺が位置する旧嘉麻郡では「財部」、「日下部」の氏族名が郡司級の職務名をとこなうなどして、『東大寺文書』などの後世の文献記録に散見される。川添昭二氏は穂波屯倉の管掌者に吉士系の渡来人を推測する(川添1967)が、古代寺院の建立にあたってミヤケを管掌する立場にあった氏族が関わっている可能性が高い。ミヤケのネットワークがこの地における古代寺院の建立を可能にしたのであろう。

おわりに

5世紀後葉から7世紀代までの「筑豊」の渡来文化の様相について、その変化をたどってみたところ、ミヤケが置かれる以前と以後とでは大きな違いがみられることに気付かされる。すなわち、6世紀前半代までは、在地首長のもつネットワークをもとに上位層の人々を中心に渡来文化の享受がみられたのに対し、6世紀後半代以降は、須恵器、馬、鉄生産などの渡来系生産技術の移植が進む中、中小の円墳や横穴墓を造営するような中間層の人々にまで渡来文化の影響が浸透していることである。また、渡来文化の内容も6世紀前半代に比べると著しく多様性を増している。このことは、ミヤケの設置を通して中央や他地域とのネットワークがより強固に再編され、人・もの・情報の流れが活発に行なわれるようになったことを示すものにほかならない。

田中史夫氏は、「地域に置かれたミヤケがそこに王権の支配をもたらすだけでなく、新たな地域的展開を許す交流をもたらした側面は、ミヤケによる支配と地域社会の主体性との接点を考えるうえでもその意義が今後検討されねばならない。」と述べている(田中2002)。近年の考古資料の増加に伴い新たな知見も増えつつある「筑豊」は、地域資料をもとにミヤケの意義を検討するケーススタディの場として最適だといえよう。

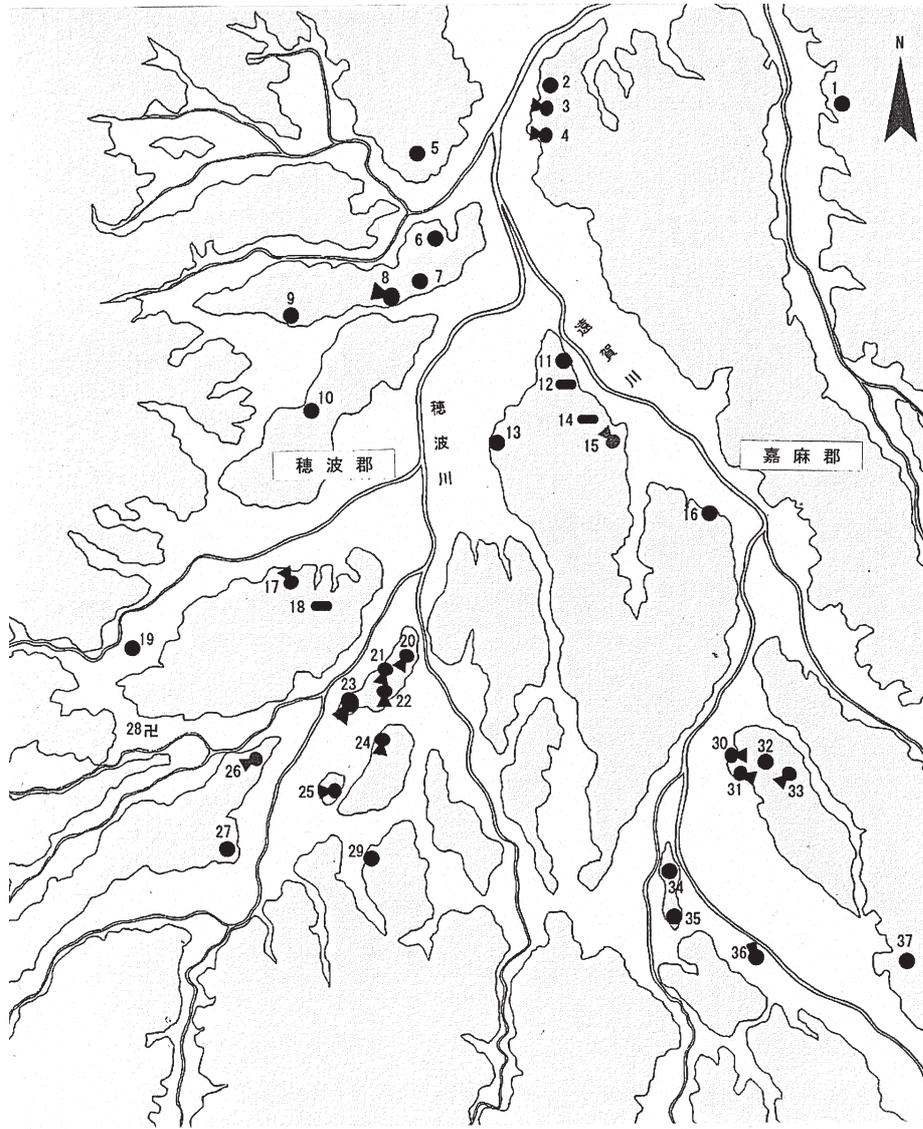
本シンポジウムを通して、上述の内容を広域な視点から議論し、「筑豊」ひいては北部九州の地域史を深めていくことができれば幸いである。

(註)

- (1) 穂波川流域の桂川グループは、時期比定が不明確な古墳が多いものの、古墳時代前期からの首長墓系譜が追えるようである。
- (2) 「我鹿屯倉」と「桑原屯倉」の比定地については、田川地域以外に諸説がみられる。
- (3) 嶋田光一氏は櫛山古墳が位置する地域が後の「穂浪郡堅磐郷」であることから、『日本書紀』にみられる「日高吉士堅磐固安銭」なる人物との関連性を推察している。
- (4) ただし、鉄鉾が出土した1号石室は盗掘を受けているため、詳細な検討は困難である。
- (5) これまで王塚古墳の被葬者は、彩色壁画を石室に施す装飾古墳であることから、筑紫君磐井との関連が示唆されてきた。筆者は、出自については有明海沿岸地域の可能性が高いと考えているが、政治的にはむしろ王権側との結び付きが強い人物であったと考えている。
- (6) 福智町教育委員会の井上勇也氏のご教示によると横穴墓の可能性が高いということである。

(参考文献)

- 李 東冠 2010 「日韓における鏝(サルポ)の変遷と変容」『還暦、還暦?、還暦!』武末純一先生還暦記念事業会
- 井上 裕弘 1985 「奈良・平安時代の合田遺跡」『合田遺跡』赤村文化財調査報告書第1集 赤村教育委員会
- 小方 泰宏 1987 「夏古墳群の歴史的位置」『郷土田川』第30号 田川郷土研究会
- 小田富士雄 1977 「豊前における新羅系古瓦とその意義」『九州考古学研究』歴史時代編 学生社
- 亀田 修一 1995 「朝鮮半島から見た豊前の寺院と古瓦」『古文化談叢』34 九州古文化研究会
- 亀田 修一 2004 「豊前西部の渡来人」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会
- 川添 昭二 1967 『嘉穂地方史』古代中世編 嘉穂地方史編纂委員会
- 木下 尚子 1996 『南島貝文化の研究』貝の道の考古学 法政大学出版局
- 齊藤 大輔 2011 「セストノ古墳出土鉄製武器・武具の再検討」『九州考古学』第86号 九州考古学会
- 嶋田 光一 1991 「福岡県櫛山古墳の再検討」『古文化談叢』児島隆人先生喜寿記念事業会
- 嶋田 光一 1999 「篋書須恵器の諸問題」『先史学・考古学論究』 龍田考古会
- 高田 貫太 1998 「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会
- 田中 史生 2002 「ミヤケの渡来人と地域社会」『日本歴史』第646号 吉川弘文館
- 田村 悟 1997 『水町遺跡群』直方市文化財調査報告書第20集 直方市教育委員会
- 長谷川清之 1991 「川崎町田原「号四郎窯跡」の紹介」『郷土田川』第34号 田川郷土研究会
- 松浦 宇哲 2005 a 「福岡県王塚古墳の出現にみる地域間交流の変容」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学友の会
- 松浦 宇哲 2005 b 「三葉文楕円形杏葉の編年と分析 金銅装馬具にみる多元的流通ルートの可能性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
- 松浦 宇哲 2007 「副葬品」『遠賀川流域の横穴墓』遠賀川流域文化財学習会
- 桃崎 祐輔 2010 「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦?、還暦!』武末純一先生還暦記念事業会
- 森 浩一 1978 「大化薄葬令の馬の殉殺について」『古代史論叢』上 吉川弘文館
- 柳沢 一男 2004 『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」010 新泉社

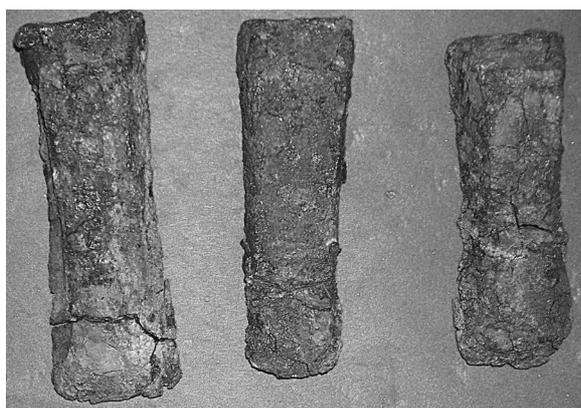


- 1 大門8号墳
- 2 川島11号墳
- 3 寺山古墳
- 4 宮脇古墳
- 5 川津1号墳
- 6 櫛山古墳
- 7 長浦古墳
- 8 山ノ神古墳
- 9 赤坂1号墳
- 10 小正西古墳
- 11 辻古墳
- 12 池田横穴墓群
- 13 忠隈古墳
- 14 鶴三緒横穴墓群
- 15 塚山古墳
- 16 かつて塚古墳
- 17 森原1号墳
- 18 西ノ浦上横穴墓群
- 19 向田古墳群
- 20 金比羅山古墳
- 21 宮ノ上古墳
- 22 太平古墳
- 23 王塚古墳
- 24 天神山古墳
- 25 ホーケントウ古墳
- 26 北古賀1号墳
- 27 桜ヶ丘古墳
- 28 大分廃寺
- 29 火打塚古墳
- 30 次郎太郎1号墳
- 31 次郎太郎2号墳
- 32 次郎太郎3号墳
- 33 沖出古墳
- 34 下白井日吉古墳
- 35 上白井日吉古墳
- 36 竹生島古墳
- 37 新行坊古墳

図1 嘉穂地域の主な古墳



図2 田川地域 香春岳西方の遺跡
 (『田川市文化財調査報告書第2集』より改変)



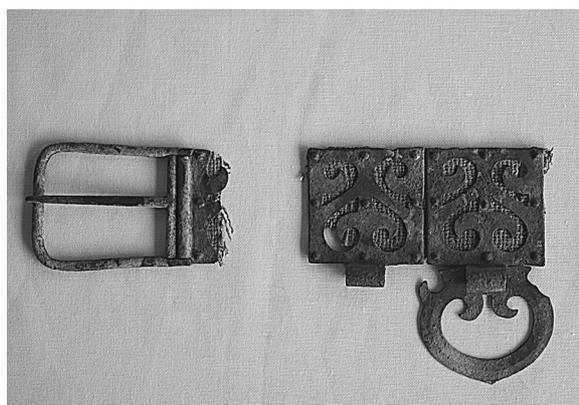
1. 山ノ神古墳 鑄造鉄斧 (九州大学蔵)



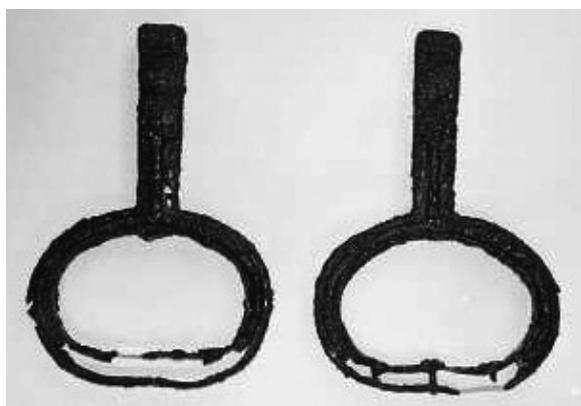
5. 長畑古墳 金製耳飾 (香春町教委蔵)



2. セストノ古墳 小壺 (田川市教委蔵)



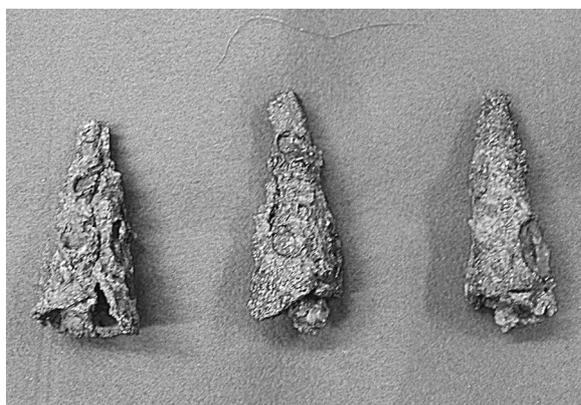
6. 櫛山古墳 帯金具 (複製) (飯塚市教委蔵)



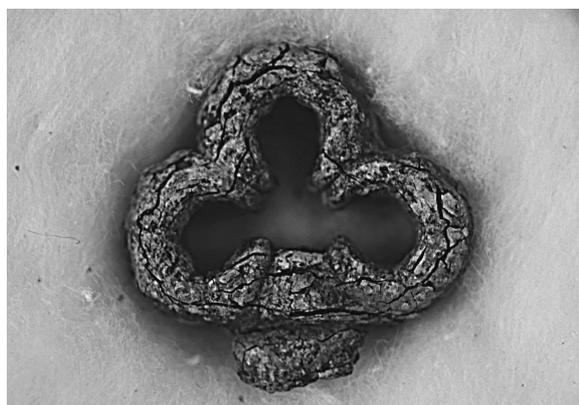
3. 小正西古墳 鐙 (飯塚市教委蔵)



7. 平塚古墳 サルポ (桂川町教委蔵)



4. かって塚古墳 鉄鏃 (嘉麻市教委蔵)



8. 夏吉21号墳 大刀柄頭 (田川市教委蔵)



9. 井手ヶ浦窯跡 瓶形土器 (飯塚市教委蔵)



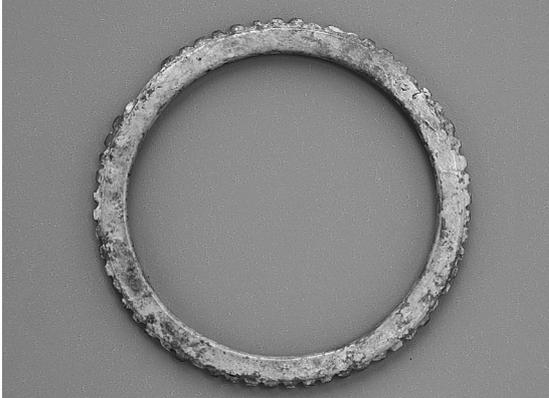
13. 伊川古墳 三足壺 (飯塚市教委蔵)



10. 西ノ浦上横穴墓 馬具 (飯塚市教委蔵)



14. 小池横穴墓 「日」の文字 (飯塚市教委蔵)



11. 二塚横穴墓 銅釦 (桂川町教委蔵)



15. 伊田狐塚横穴墓 「夫」の文字 (田川市教委蔵)



12. 神崎1号墳 大刀柄頭
(福岡県アジア文化交流センター蔵)



16. 天台寺跡 古瓦 (田川市教委蔵)

M E M O

M E M O

M E M O

講師の紹介

田 中 史 生 先生

國學院大學大学院博士課程修了
現在、関東学院大学経済学部 教授
著書 『倭国と渡来人』 2005など

桃 崎 祐 輔 先生

筑波大学大学院博士課程単位取得
現在、福岡大学人文学部 教授
著書 「九州の屯倉研究入門」 2010など

朴 天 秀 先生

大阪大学大学院博士課程留学
現在、韓国・慶北大學校人文大學 教授
著書 『加耶と倭』 2007など

あとがき

本書は、平成24年11月10日に実施した古代史シンポジウム「6世紀の九州島ミヤケと渡来人」の予稿集です。

本シンポジウムでは、次の機関のご協力を受けました。記して感謝申し上げます。
九州国立博物館、九州大学考古学研究室、九州歴史資料館、飯塚市教育委員会、田川市教育委員会、大任町教育委員会、香春町教育委員会、桂川町教育委員会、福智町教育委員会

次の機関から写真資料の提供を受けました。

九州国立博物館 (裏表紙・12)、九州歴史資料館 (表紙)、飯塚市教育委員会 (表紙・3・10)、香春町教育委員会 (表紙・5)、桂川町教育委員会 (7・11)

掘ったバイ筑豊2012 古代史シンポジウム
『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人』予稿集

平成24年11月10日 (土)

編集 / 発行 嘉麻市教育委員会
福岡県嘉麻市大隈町733番地

印 刷 有限会社 伊藤印刷
福岡県嘉麻市大隈町1042番地